



97周年ご降誕祭号



WE LOVE YOU

SRI SATHYA SAI RAM NEWS

LOVE ALL SERVE ALL
HELP EVER HURT NEVER

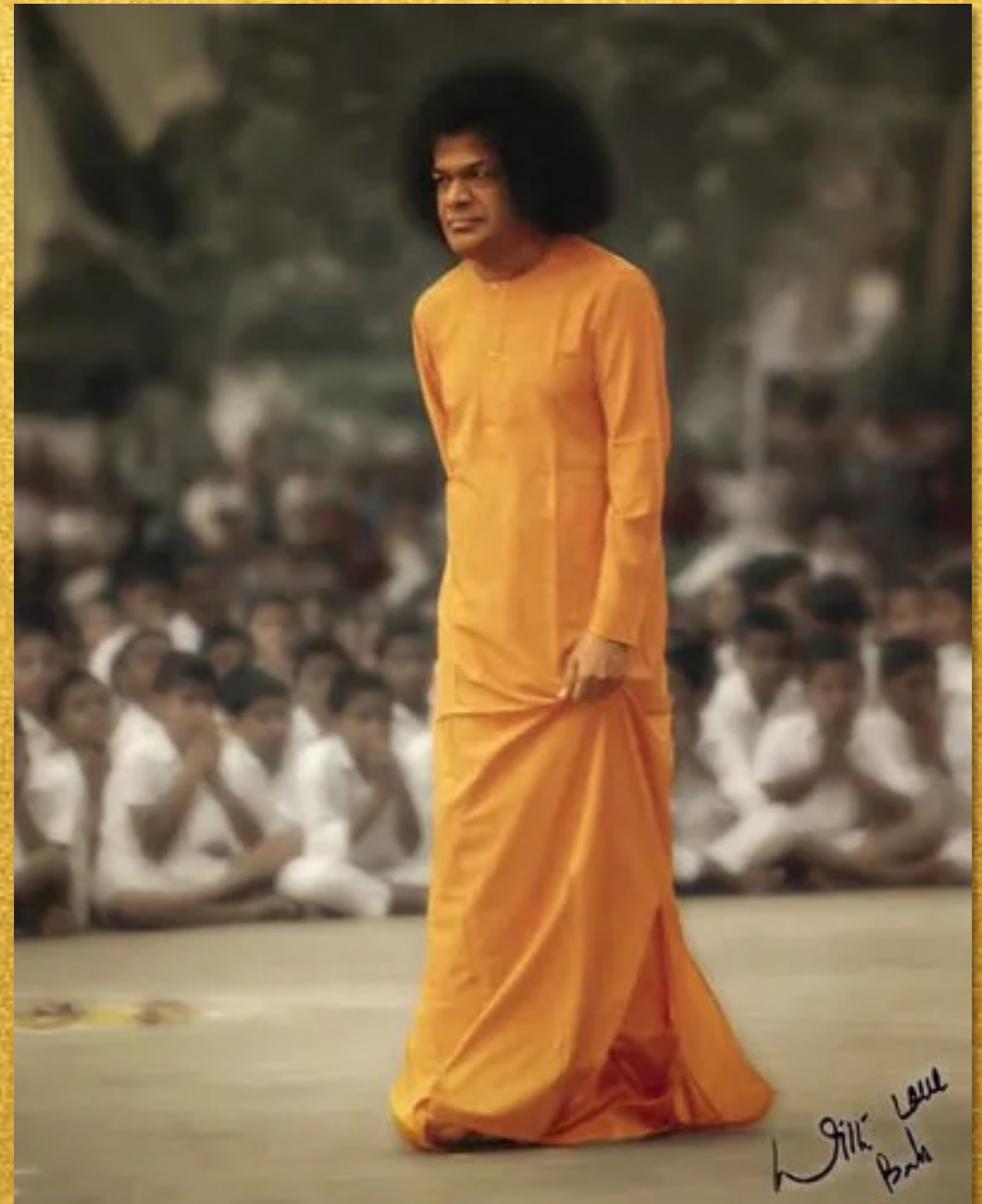
No.211 / 11月号 / 2022

*W. M. Looee
Bash*



97周年ご降誕祭号 CONTENTS

- サイの御教え
 - 「母の恩寵の重要性」
 - 「バーラタの栄光を取り戻しなさい」
- Sri Sathya Sai Baba 様ご生誕100周年記念ヴィジョン
「今ここに生きる」
- サッティヤム・シヴァム・スンドラム
- サイと共に
- 帰依者インタビュー「私の旅」 (第8回)
- ベジタリアン クッキング
- ワカ チンナ カタ
- 活動報告：スタディー サークル





SRI SATHYA SAI RAM NEWS



サイの御教え

母の恩寵の重要性



バーラタの栄光を
取り戻しなさい



ジャスミンやキンコウボクのような
甘い香りの花よりもかぐわしく
チーズやバターよりも柔らかく
孔雀（くじゃく）の瞳よりも美しく
月光よりも快いもの
それは母の愛
(テルグ語の詩)



Om

BHAKTI NOTE

憶念と探究

この世界は、
シヴァの宇宙の舞
(シヴァターンダヴァ)

LOVE ALL SERVE ALL
HELP EVER HURT NEVWR



Om

BHAKTI NOTE

憶念と探究

自分自身の光り輝く力によって
輝いている人は皆、
バーラタ。

LOVE ALL SERVE ALL
HELP EVER HURT NEVWR



サイの御教え

1999年女性の日の
ババの御講話

母の恩寵の重要性



ジャスミンやキンコウボクのような
甘い香りの花よりもかぐわしく
チーズやバターよりも柔らかく
孔雀（くじゃく）の瞳よりも美しく
月光よりも快いもの
それは母の愛

(テルグ語の詩)

愛の化身たちよ！ 動けるものと動けないものが存在するこの世界は、シヴァの宇宙の舞（シヴァ ターンダヴァ）にほかなりません。この至福あふれるシヴァ ターンダヴァは、畏敬の念を起こさせ、驚きに満ち、人間の理解を超えています。昼と夜、喜びと苦痛、生と死という二元性には終わりがありません。誕生と死が自然なことであるのと同じように、ダルマとアダルマ（正義と非正義）の存在も自然なことです。ダルマが隆盛になればアダルマは衰退し、アダルマが隆盛になればダルマは衰退します。男性も女性も、このダルマとアダルマの隆盛と衰退の責任を負っています。人間は、内なる神性に気づくことができず、神と自分は違うものであると錯覚しています。

シヴァ シャクティの原理

スマティーは、夫の命を救うために太陽が昇るのを止めさせることさえできました。サーヴィトリー

は、死んだ夫をよみがえらせることさえできました。彼女たちはその力をどこから得たのでしょうか？ それは、彼女たちの信愛と純潔の力です。信愛と熱意を持って神を礼拝するとき、神の性質であるサツティヤム・シヴァム・スンドラム（真・善・美）がその人の中に姿を顕わします。このまぶしく輝く神の力は、人の中に潜在しています。カムサが自分の妹デーヴァキーを殺そうとした時、夫のヴァスデーヴァが間に入ってデーヴァキーの命を救いました。それはヴァスデーヴァが生来持っていた神の力によって可能となりました。神の力を得るには、なんら特別な努力をする必要はありません。神の力はあなたの中にあります。神の力は、あなたが我を忘れて神を憶念したとき、初めて顕れます。

人間は、自分が持っている神の性質を忘れて、神は自分とは別のものだと思い、神を得ようとさまざまな霊性修行をします。人々は、ラーマ、クリシュナ、イエス、アッラーといった異なる御名で神を崇めます。しかし、ただ一つの根源的な力が存在するのみであり、それはシヴァ シャクティという形にほかなりません。シヴァ シャクティの原理はすべてに浸透しています。この世界は、バヴァーニー シャンカラ〔命を与える者という意味のパールヴァティー女神の別名と、至福を与える者という意味のシヴァ神の別名〕という、非常に意味深い名前を持っています。バヴァーニーはシュラッダー〔シラッダー〕

（揺るぎない信愛）を、シャンカラはヴィシュワース〔ヴィッソヴァース〕（信念）を意味します。それはつまり、世界はシュラッダー（揺るぎない信愛）とヴィシュワース（信念）という二つの原理に基づいているということの意味しています。バヴァーニーとシャンカラは不可分で、相互に依存しており、すべてに浸透しています。ですから、全世界はアルダナリーシュワラ〔半身がパールヴァティーで半身がシャンカラという両性具有の神〕の姿なのです。このことに基づいて、「シュリーマティー」〔シュリーマト〕と「シュリー」〔シュリ〕という語が、女性、男性のそれぞれの呼びかけに使われているのです。「シュリーマティー」はバヴァーニーを現しており、「シュリー」はシャンカラを象徴しています。あなたの崇める御名と御姿がどのようなものであろうとも、確固たる信愛と信仰心を持つことが必要です。この二つがなければ、あなたは人生において何事も成し遂げることはできません。

シラッダーヴァム ラバテー グニャーナム
〔ニャーナム〕
（揺るぎない信愛を持っている者だけが英知を得る）

信念を通してのみ、人は内なる神性を認識することができます。人の内にある神性は、バヴァーニーとシャンカラの結合体です。

神はあなたがしているすべてのこと目の目撃者

全世界は、イッチャ シャクティ（意志の力）、クリヤー シャクティ（行動の力）、グニャーナ シャクティ（英知の力）の結合体です。イッチャ シャクティ（意志の力）は心（マインド）と関連しており、クリヤー シャクティ（行動の力）は身体、グニャーナ シャクティ（英知の力）はアートマ〔真我〕と関連しています。これが、あなたは一人の人間ではなく三人の人間であると言われる理由です。一人は、あなたが自分だと思っているあなた（身体）、もう一人は、他人があなただと思っているあなた（心体）、そしてもう一人が、本当のあなた（アートマ原理）です。あなたは本質的には神なのですが、そのことを理解することができずにいるのです。ヴェーダは宣言しています。

サルヴァタッ パーニパーダム タット
サルヴァトクシシロームカム
サルヴァタッ シルティマルローケー
サルヴァマーヴルッティヤ ティシタティ
（その手、足、目、頭、口、耳を万物に行き渡らせ、
神は全宇宙に遍満している）

神は、あなたがしているすべてのこと目の目撃者です。あなたは誰かをだますことができるかもしれませんが、神はだませません。なぜなら、神は常にあ

なたの中において、あなたと共にいるからです。

バヴァーニー シャンカラの恩寵がなければ、あなたの努力はすべて無駄になるでしょう。名と姿が重要ではないのは、名と姿は変化するものだからです。身体は水の泡のようなものであり、心（マインド）は狂った猿のようなものです。これらを信頼することはできません。しかし、これらの内には、真実で永遠のものが存在しています。それは神性です。この隠れた神性を顕現させるためには信愛を養う必要があります、それによってあなたの信念は強まります。木は、根が深く伸びれば伸びるほど大きく強くなります。それと同様に、信念は、信愛が深まれば深まるほど強くなります。もしあなたに信念と信愛が欠けていたら、どんな御名も御姿も決してあなたを助けられないでしょう。

どの人の内にも無限の神の力が潜んでいます。もし、あなたがそれを顕わすことができれば、スマティーがしたように太陽が昇るのを止めることも、サーヴィトリーが証明したように死者をよみがえらせることもできるのです。神の力を顕現させた時、あなたは神になります。

神はあなたが得るに値するものは何でも与える

アートマは遍在です。アートマを経験するために

は、確固たる信愛と信念を持っている必要があります。今日、人々は、ローカー サマスター スキノー バヴァントゥ（世界のすべての人が幸せでありますように！）と祈ります。それは、シュラッター（揺るぎない信愛）とヴィシュワサ（信念）が育まれたとき、初めて可能となります。喜びや悲しみは流れゆく雲のようなものです。それらは来ては去っていきます。道徳心は、芽生えると育ちます。ですから、道徳心を養いなさい。富や地位や権力を熱望してはなりません。神は、あなたが得るに値するものは何でも与えます。神への愛を育てなさい。それは最高のサーダナ〔靈性修行〕です。

今日、人々は神に到達するためにさまざまな靈性修行をします。しかし、そのすべては精神的な満足をもたらすだけです。ナーラダ仙は、九つの信愛の道を広めました。それは、シュラヴァナム（聴くこと）、キールタナム（歌うこと）、ヴィシュヌ スマラナム（神を憶念すること）、パーダサーヴァナム（蓮華の御足に奉仕すること）、ヴァンダナム（崇敬すること）、アルチャナム（礼拝すること）、ダースヤム（神の召し使いとして奉仕すること）、スネーハム（友情を持つこと）、アートマ ニヴェーダナム（神我への全託）という道です。これらの修行が永続する喜びを授けることはできません。宇宙は神の御姿そのものである（ヴィシュワム ヴィシュヌスワルーパーム）という揺るぎない信念を持ちなさい。

い。ヴィシュヌ〔神〕は起因であり、ヴィシュワ〔宇宙〕は結果です。この二つは切り離すことのできないものです。

ヴェーダは宣言しています。「アチャラム チャラメーヴァチャ」（神は不動でありながら明らかに動いている）と。実例を挙げましょう。夢を見ている状態で、あなたはさまざまな場所を訪れ、幸福や悲しみを経験します。しかし、実際には、あなたの身体はベッドに横たわったまま——不動の状態です。

ですから、あなたがこの世で見たり経験したりするものはすべて、夢でしかありません。アートマ〔真我〕だけが真実であり永遠です。アートマはスティラム（永遠のもの）であり、この世はチャラム（変化するもの）です。人生は、このスティラム（永遠のもの）とチャラム（変化するもの）の組み合わせです。

ジャントウナーナム ナラジャンマ ドウルラバム
（人間として生まれることは、
すべての生き物の中で最も稀有（けう）なもの）

すべての生き物が人間として生まれ得るという幸運にあずかれるわけではありません。すべての生き物が人間としての生を得るほど幸運なわけではありません。

すべての人間が神を体験するわけでもありません。神に到達するために偶像崇拜といった霊性修行をする人たちもいます。人は徐々に内面へと自分の目を向けていき、自分とアートマは一つだということを体験すべきです。

アートマの終わりなき至福を体験しなさい

あなたがどれほど神を愛しているかは、それほど重要なことではありません。重要なのは、神がどれほどあなたを愛しているかということです。神は、サット・チット・アーナンダの化身です。サットは永遠のものを意味します。チットは完全なる意識です。水と砂糖が混ざるとシロップ〔砂糖水〕になります。同様に、サットとチットが結合するとアーナンダ（至福）が生じます。世俗の喜びから経験するアーナンダ（至福）は一時的なものです。

目を内面に向けてアートマを体験したときにのみ、あなたは真実と尽きることのない至福を得ます。アートマは、姿形はありませんが、至福で満ちています。

愛の化身たちよ！アートマの終わりなき至福を体験すべきです。

生まれた時、人の首にはどんな貴重な宝石の
首飾りも掛かっていない
しかし、重たい首飾りが必ず掛かっている
それは、善果であれ悪果であれ、
過去の行いの果報をつないで作った首飾りなのだ
(テルグ語の詩)

母を神として崇敬しなさい

ヴェーダは宣言しています。

マートウルデーヴォーバヴァ
ピトウルデーヴォーバヴァ

母を神として崇敬しなさい
父を神として崇敬しなさい

かつて、ヴィシュワ・ヒンドゥー・パリシャド〔VHPと呼ばれる過激派のヒンドゥー教グループ〕の書記長、アショク・シンガルが私のもとにやって来て嘆願しました。「どうかラーマの生誕地を教えてください。それがわかれば、そこに寺院を建設することができます」。私は、「ラーマの真の生誕地はカウサリヤー妃の胎内です」と答えました。庶民であれ、神の化身であれ、母親の胎内がすべての人の生まれた場所です。ですから、母を神として崇敬しなさい。母の名を守り、母を敬いなさい。

今日は11月19日です。この日は、あなた方に母の重要性を思い出させるために、女性の日として祝われています。あなたは母の望みに応じて行動しなければなりません。母に背いてはなりません。クリシュナ神の大いなる帰依者であったチャイタニヤは、結婚を望んでいませんでしたが、母親のたつての願いに従ってラクシュミーという娘と結婚しました。しかし、不運にも、ラクシュミーは結婚後まもなく死んでしまいました。チャイタニヤの母、サッティデーヴィーは、息子の思いに反して結婚させたことをたいそう悲しみました。チャイタニヤは母にこう告げました。「これは良心の命じること背いた結果です」。ですから、自分のしていることが正しいと感じるなら、母親を説得するように努めなさい。ただし、決して母親の感情を傷つけてはなりません。

あなた方は、女性は体も心も弱いものであるという間違った見解を持っているかもしれません。しかし、実際には女性は男性よりも強いのです。叙事詩『マハーバーラタ』〔ジャイミニ仙版〕に、アルジュナとの結婚を望んだ女王プラミーラー〔女性の王国の王女〕の物語があります。アルジュナは彼女との結婚を望んでいませんでした。プラミーラーは、アルジュナを捕らえるために最高司令官のマラーヤーヴァティーを送りました。マラーヤーヴァティーはアルジュナと激しく戦い、ついにアルジュナを捕まえてプラミーラーの前に連れていきました。プラ

ミーラーはアルジュナに求婚しましたが、アルジュナは、たとえ命に代えても結婚はしないと断りました。プラミーラーはクリシュナ神の敬虔な信者で、アルジュナもそうでした。二人は熱烈に祈りました。宇宙劇の監督であるクリシュナ神には、自らの計画がありました。クリシュナ神はその場に現れ、プラミーラーとアルジュナをそばに呼び、二人の手をつながせて、マントラを唱え、おごそかに結婚式を執り行いました。

神はどんなことでもすることができる

神はどんなことでもすることができます。神は地を天に、天を地に変えることもできます。しかし、人間は神への信愛と信念に欠けています。人は世俗のことを信じ、霊性を信じません。バクティ（信愛）にまさるものはありません。「バクティ」の「バ」は「光沢」や「光輝」を意味し、「クティ」は「引き寄せる」という意味を持ちます。あなたは、バクティから身体と心（マインド）と霊〔アートマ、魂〕へのシャクティ（力）を得ます。バクティ（信愛）とシャクティ（力）によって、あなたは神へのラクティ（愛着）に浸り、世俗へのヴィラクティ（無執着）を培うことができます。すると、神はあなたにブクティ（食物）を与え、さらにムクティ（解脱）をも与えます。このようにして、人はバクティ（信愛）からムクティ（解脱）へと旅する必要

があるのです。昨日、私が話したように、人生は「私」から「私たち」への旅です。聖地であるティルパティやヴァーラーナシー〔ベナレス〕、ガヤーやプラヤーグへ行くために、あなたは大変苦労して長旅をするかもしれません。一方、「私」から「私たち」への旅は、あなたが自分を身体から引き離して真我への愛着を育む旅であるという意味において、非常に短い旅です。そのためには、母の恩寵が極めて重要です。

神は必要が生じればいつでもやって来る

アビマンニュがまだ母スバドラーの胎内にいた時、アルジュナは妻のスバドラーにたくさんの物語を話して聞かせていました。ある日、アルジュナは、パドマヴェーハ（蓮の花の形をした軍陣）に入る際の複雑さと細かな点をスバドラーに説明していました。アルジュナがスバドラーにパドマヴェーハから脱け出す方法を話す前に、宇宙劇の至高の監督である主クリシュナがその場にやって来ました。神は必要が生じればいつでもやって来て、適切に自分の役を演じます。

クリシュナはアルジュナに尋ねました。

「君は何という過ちを犯しているのだ！ 君の言葉の一部始終を聞いているのは、スバドラーではなく、

胎内にいる子供だ。子供にパドマヴェーハについて教える必要性がどこにある？」
クリシュナは、アルジュナを連れて出ていきました。

後に、クルクシェートラの戦いで、アビマンニュがパドマヴェーハの中で命を落としたのは、その軍陣から脱け出す方法を知らなかったからです。クリシュナは、なぜこのようなことをしたのでしょうか？ それは、アビマンニュはヴィーナ スワルガ（英雄の天国）に到達しなければならなかったからです。実際、カウラヴァ兄弟がアビマンニュにパドマヴェーハに入るように挑戦をしかけてきた時、アビマンニュは母スバドラーのもとへ赴き、母の許可と祝福を請い求めました。スバドラーは、アビマンニュが戦場に行かないよう最善の努力を尽くして説得しました。スバドラーは言いました。

「私の愛しい息子よ、パドマヴェーハに入って、またそこから脱け出すのは、なまやさしいことではありません。それに、あなたの妻は身ごもっていますし、あなたの叔父上であるクリシュナと父上であるアルジュナは今ここにおりません。ですから、戦場に行くという考えはあきらめなさい」

しかし、アビマンニュは母の忠告に耳を貸しませんでした。アビマンニュは言いました。

「母上、私の生まれはクシャトリヤ（武人階級）です。クシャトリヤにとって、敵から突きつけられた挑戦に怖気づくほどの侮辱はありません。実に、母

上は私を励まして、敵と闘って圧勝せよと勇気づけるべきなのです。戦（いくさ）に行く気持ちをくじかせるようなことをするのは、母上の役目としてふさわしくありません」

アビマンニュは、自分がしようとしていることは正しいということは分かっていたのですが、母の愛を理解することはできませんでした。アビマンニュが命を落としたのは、母の願いに背いて戦場に行ったからです。

神の恩寵と人間の努力

母の愛よりも偉大なものはありません。母親の言葉は常に甘美です。時に厳しい言葉を使うこともあります。それはただ、あなたを正すためであり、傷つける意図はありません。この世に邪悪な息子はいるかもしれませんが、邪悪な母は決して存在することはできません。女性の日が祝われているのは、母の愛の価値と、あなたへの母の思いをあなた方に理解させるためです。母親、父親、師、神の中で、最高位を与えられているのは母親です。現代の若者は母親を顧みません。若者は、自分はいそがしう学があるけれど、母親は何も知らないと思っています。そのように考えるのは大きな間違いです。決して母を見下してはなりません。母親も、子供に自分の望みを強要してはなりません。母親は、愛と誠意を通じて子供を正しい道に置くべきです。母親は、

わが子が善良になることを切望すべきであり、偉大になることを望む必要はありません。

ラーマは善良で、ラーヴァナは偉大でした。ラーマは自分が学んだことは何であれ実行し、それゆえに名声を得ました。一方、ラーヴァナは学んだことを何も実行せず、無知に浸っていました。その結果、ラーヴァナは良い評判を得ることができませんでした。良い評判を得るためには、罪への恐れと神への愛を持つ必要があります。神への愛と罪への恐れが欠如しているために、人間性が衰退しています。これが、今の世の中が不安定である原因です。

愛の化身たちよ！ 神はガーナローラ〔歌を好む者〕でありガーナプリア〔歌を愛する者〕（歌に引き付けられる者）です。詩や祈りは、信愛を込めて歌われた歌ほどには神を引きつけません。皆さんはM・S・スップラクシュミーの美しい歌を聞きましたね。彼女はガーナ コーキラ〔うぐいすのように甘く美しい歌声の人〕という称号を得ています。私は、まだとても若かった彼女がミーラーの役を演じたのを見たこともあります。

多くのアーティストがダンスで名声を博しています。ウダイ・シャンカール〔舞踊家。シタール奏者ラヴィ・シャンカールの兄〕は、そうした偉大なダンサーの一人でした。彼が踊っている時、足が床に

着いているのを見るのがほとんどできなかつたくらいです。彼の妻、義理の娘、そして弟子たちが、明日ダンスプログラムを上演するために、ここに来ています。こういった芸術は練習だけでマスターできるものではありません。神の恩寵も必要不可欠です。電流が流れるにはプラスとマイナスの両方が必要です。それと同じように、成功に至るまでには人間の努力と神の恩寵が共に必要なのです。

決して怒りとエゴに入り込む隙を与えてはならない

学生諸君！ 青年男女の皆さん！ 神はあなたの気持ちに一致した反応をします。ですから、ネガティブな思考を抱いてはなりません。たとえ孔雀の卵をニワトリが温めて卵がかえっても、その卵から出てくるのは孔雀だけです。ダイヤモンドは、肥溜めに落ちてでも価値と輝きを失うことはありません。それと同様に、善良な人は、どこにいても常に良い評価を得ます。エゴと憎悪と怒りは、人間の最悪の敵です。誰かを正しい方向に導くために、その人に多少の怒りを示すのはかまいませんが、決して誰をも憎んではなりません。怒りとエゴに付け入らせてはなりません。

私は自分が教えることのすべてを、手本で示しています。中には、スワミが自分に話しかけてくれないのは、スワミが自分を嫌いだから、あるいは自分

を怒っているからだ、と感じている者がいます。それは単に彼らの想像であり、彼らに良心の呵責（かしゃく）があるからにほかなりません。私は誰をも憎みはしません。あなた方を正しい道に導くために、私は時に怒ったふりをすることがあるかもしれません。けれども、実際には、私は誰に対しても怒りや憎しみは持っていません。中には、そうすれば自分の望みをかなえてもらえるだろうと期待して、グラマー セヴァ（村への奉仕）をする人たちがいます。私を喜ばすには、それで十分でしょうか？すべての欲望を手放して、あなたのハートを清めなさい。そうすれば、私はあなたに頼まれずとも、あなたに必要なものをすべて授けます。ネガティブな思考を手放さないで、どうしてポジティブな結果を期待できますか？あなたのハートをポジティブな思いで満たしなさい。ハートを愛で満たしなさい。その時、あなたのすべての思考と言葉と行いは、愛で満たされるでしょう。

万人はヴィシュワ マータの子供たち

愛の化身たちよ！決してあなたの母の愛を忘れずに、どんな状況の下でも母を幸せにしなさい。あなたが母を幸せにするときにのみ、私はあなたに満足します。ウマー・バーラティーが指摘したように、すべては一つであることを理解するよう努力しなさい。もしあなたが他人と自分を別のものだと考える

なら、憎しみが入りこむ余地があるでしょう。私とあなたは一つであることを認識しなさい。身体は異なっても、あなた方は同じ愛の原理で結びついているのです。あなたの母があなたを愛するように、あなたはすべての人を愛すべきです。すべての人はヴィシュワ マータ（万物の母）の子供です。すべての人は兄弟姉妹です。何であれ差別意識を持つてはなりません。太陽はどこの世界でも一つであり同じです。太陽は貯水池にも川にも海にも映るのと同じように、同じ神性がすべての人のハートに映っているのです。

エーカム サット

ヴィップラー ヲッ バフダー ヴァダンティ

（真理は一つ、

しかし、学者はそれを異なる名で呼ぶ）

自分はラーマだけが好きだとか、クリシュナだけ、シヴァだけ、サイ ババだけが好きだと言うのは正しくありません。一なる神がいるだけであり、神は遍在です。他の宗教を憎んではなりません。ヒンドゥー教徒はより良いヒンドゥー教徒になるべきであり、クリスチャンはより良いクリスチャンに、イスラム教徒はより良いイスラム教徒になるべきです。愛がなければ、その人をイスラム教徒とも、ヒンドゥー教徒とも、キリスト教徒とも、シーク教徒とも呼ぶことはできません。実際、愛のない人は地上

の悪魔です。愛のない人だけが、宗教に基づく違いに余地を与えるのです。あなたがハートを愛で満たしたとき、初めてすべての宗教は一つであることがわかるでしょう。

バーラタの文化は、母親に最大の重要性を与えています。人は、自分の国を母国と呼びますが、父国とは呼びません。主ラーマは宣言しました。「ジャンニ ジャンマブーミシュチャ スワルガダピ ガリーヤスイ」（母と母国は天国よりも偉大である）と。国は母であり、文化は父です。決してあなたの国と文化を忘れてはなりません。古来、バーラタの文化は、「ローカー サマスター スキノー バヴァン トゥ」（世界のすべての人が幸せでありますように！）という祈りと共に、平和と愛のメッセージを広めてきました。あなた方は、この神聖な文化を支えなければなりません。

どのような御名、どのような御姿の内に神を礼拝してもよいのです。しかし、神は一つ、ただ一つである、という真理を理解しなさい。

シュリ サティヤ サイ ババ述

1999年11月19日

ブラシャーンティ ニラヤムの

サイ クルワント ホールにて

Sathya Sai Speaks Vol.32 Part2



訳注1 スマティーの物語 ウグラシュラヴァスというバラモンの妻スマティーは、貞節の誉れ高い貞女だった。ウグラシュラヴァスは病気で足が不自由になり、出かけるときはいつもスマティーが背負っていくようになった。ある日、ウグラシュラヴァスは売春宿に行きたいと言い、夫に忠実なスマティーは何も言わずに夫を売春宿まで連れていこうとした。それを見ていたマーンダヴィヤ仙は、ウグラシュラヴァスの非道に怒り、「明日、朝日が昇ったら首が落ちるように」と呪いをかけた。スマティーは悲しんで、「私が真に貞女であるならば、明日の朝、太陽が昇りませんように」と祈願した。すると、翌朝になっても太陽は昇らなかった。神々も人間も困ってしまい、スマティーのもとに行って、夫の命を保証するから太陽を昇らせるようにと頼み、スマティーは太陽が昇るようにした。

訳注2 サーヴィトリーの物語 ヤマ（死神）がサーヴィトリーの夫サティヤーヴァンの命を取った時、サーヴィトリーは悲しみを募らせて、夫を生き返らせてほしいとヤマに懇願した。「夫を生き返らせるか、私の命を取るかしてください。私は夫なしでは生きられません。私たちは一つなのです」。夫の命を取った後、ヤマがその場を去ろうとすると、サーヴィトリーはヤマの行く手をふさいで、ヤマを行かせなかった。そのため、ヤマはサーヴィトリーの願いに耳を傾けるしかなかった。ヤマがサーヴィ

トリーに「どうして欲しい？」と尋ねると、サーヴィトリーは「私に夫を返してください。なぜなら私は夫なしでは生きていけないのです」と答えた。結局、ヤマはサーヴィトリーの願いに屈した。ヤマはサーヴィトリーの貞操と決意を喜んで、サティヤーヴァンをよみがえらせ、さらにはサーヴィトリーとサティヤーヴァンに数々の恩恵を授けた。





サイの御教え

65歳御降誕祭の
ババの御講話

バーラタの栄光を
取り戻しなさい



神聖アートマの化身である皆さん! 最も古い時代から、バーラタ人〔インド人〕は真理〔真実／サティヤ〕を神と見なし、真理を愛し、真理を促し、真理を保護し、そうすることによって神性を得ました。バーラタ人は真理に徹し、ダルマ（正義）と結び付き、社会における道徳を第一の義務として尊重しました。今、人々は、真理と正義を忘れていたために、国家的な問題を解決することも、共同体の対立を終わらせることもできずにいます。私たちは、東にベンガル湾、西にアラビア海を持ち、その両方がインド洋で合流しています。それと同じように、バーラタ〔サンスクリット語でのインドの正式名称／神を愛する者、あるいはバラタの子孫といった意味がある／ヒンディー語ではバーラト〕は、世俗の繁栄と霊的進歩の結合を例示しています。バーラタは、ジーヴァ（個々の魂）とブラフマー（普遍の魂）の一体性が浸透している国です。

私たちが「バーラタ」と言うとき、バーラタという単語は特定の個人や国や状況とは関係ありません。この単語には、さまざまな典拠によって多くの異なる派生的な意味が与えられていますが、それらはあくまでも個人的な解釈にすぎません。いくつかのプラーナ〔古来の神話集〕によれば、この国にバーラタという名前が付けられたのは、この国はジャダバラタという王によって統治され

ていたからであるとあります。他には、ドゥシュヤンタとシャクンタラーの息子で、この国を支配していた、かのバラタ王に由来するという説もあります。他にも、シュリ ラーマの弟であるバラタがラーマの神聖なサンダルを王座に置いて国を治めたので、この名前はインドに起因すると説く人もいます。

ですが、「バラタ」という単語はいつできたのでしょうか？ この名前は、ジャダ バラタがその名を授かるより前、ドゥシュヤンタの息子とラーマの弟の命名より前から存在していたはずで、バラタという名前は太古の昔から存在していたことは明らかです。

「バラタ」は人間家族全体を意味する

サラスワティー女神は、サラスワティーやバガヴァティーやバーラティーと呼ばれます。サラスワティーはヴァークデーヴァター（話し言葉の女神）を意味します。ですから、言葉話す才能を持って生まれた人は誰もがバーラタです。バーラタという名前は、特定の個人や国とは関係ありません。バーラタという単語は、人間家族全体に適用されます。「バ」は、神聖な知識によって表される原理を指します。「真我の知識」が「バ」です。真我の知識を喜ぶ人たちが「バーラタ」です。したがって、自分自身の光り輝く力によって輝いている人は皆、バー

ラタなのです。

この単語は、バーラタ人は戦い（サングラーマム）に長けた者であるという意味の語根にも由来しています。サングラーマムとはどういう意味でしょうか？ それは、対峙（たいじ）する敵対勢力を、神聖な霊的な力によって征服することを意味します。

「Balam Bharam Bhavathi Bibhartheh」〔バラム バラム バヴァティ ビバルテーハ〕は、ニルクタ〔ヴェーダの補助学であるヴェーダアンガすなわちヴェーダーンガのうちの一つ〕の中で使われている言葉です。バラ（バラム、力）とは、ブランマバラ（アートマの力）、テージョーバラ（内なる光の力）、シャーストラバラ（経典の知識から得られる力）のことです。バーラタとは、これら三種類の強さを持つ者のことです。シュルティ（ヴェーダ）は、バラをヤグニヤ（供犠）と定義しています。したがって、バーラタとは、ヤグニヤを行うことによって力を得た者ということになります。したがって、バーラタ人は、アートマバラ（神霊すなわち真我の力）によって神聖な力を獲得した者なのです。ですから、誰であろうと、どこの国であろうと、この神霊の力を得る必要があるのです。

バーラタは豊かな国

バーラタは自然に恵まれた国です。バーラタは、

すべての道徳、霊性、世俗的な知恵の第一の源です。

バーラタはアンナプールナー（豊穡の国）です。これほど神聖な国を貧しい国と見なすのは、頭がどうかしています。私たちは貧しい国ではありません。バーラタは天分豊かな国です。もし、豊かな国でなかったら、なぜ、ムガール人やヨーロッパ人などがこの国を侵略したのでしょうか？ 天分豊かな国であるにもかかわらず、私たちはその豊かさを守ることができずにいます。その理由は何でしょうか？ それは、国民に団結力（一体性）がないからです。

自由は勝ち得ましたが、団結は達成されていません。団結力がないからこそ、バーラタはあらゆる種類の災難に見舞われるのです。ガズニーのムハンマド〔当時のガズナ朝帝国の統治者〕はパンジャブ地方に侵入し、略奪品として700モーンド〔2万6110キログラム〕の金をこの国から持ち去りました。ナガラコータには、すべてを金でこしらえた30ヤード×5ヤード〔27.4 × 4.6メートル〕の会堂がありました。その会堂は侵略者によって丸ごと持ち去られました。

これほど豊かな国に生まれたにもかかわらず、人々が自分の国に誇りを持たないのは残念なことです。どこを向いてもスワールタム（利己主義の横行）〔スワは自分、アルタムは富の意〕ばかりが目

につきます。神の愛の化身である皆さん！ 利己心を捨てなさい。団結を促しなさい。調和の至福を味わいなさい。

バーラタがどんなに神聖な国であるか、そろそろ気づいてもいいころです。この神聖な土地には、何一つ欠けているものはありません。「バーラタにないものは、他の場所にもない」という古来の格言があります。それほど多種多様な恵みを授けられているにもかかわらず、この国は貧しく後進的であると見なされています。これは妄想から生まれたものです。この妄想から解放されて、初めて私たちはアートマの至福を体験することができます。私たちは、ブラマ（妄想）を取り除くことができ、初めてブラフマンを体験することができます。

バーラタ国内ですべてが手に入るのに、なぜ他の国々に物乞いに行くのですか？ あらゆるものはバーラタに源を発しています。ですから、バーラタに生まれたからには、バーラタの栄光を広めるために尽力しなさい。すべての帰依者は、バーラタの偉大さを保護し、促進することを誓うべきです。バーラタ人は、自分の力を知らない象のように、自分の力に気づいていません。莫大な力を備えているにもかかわらず、バーラタ人は、象使いの前で弱腰になっている象のように振る舞っています。皆さんはその弱さを捨てなければいけません。

バーラタの比類のなさを自覚せよ

バーラタは、深遠な真理を説いた偉大な賢人や聖人を数多く輩出しています。バーラタは、国の自由のために戦った英雄たちの土地でもあります。さまざまな芸術や科学、音楽や文学の知識をリードしてきた国でもあります。この神聖な土地に生まれた多くの人がある無比の偉大さに気づいていないのは、大変残念なことです。母への愛は甘露のごときものです。母国への愛がないのは、なんと残念なことでしょう！

皆さんは母国を愛さなければなりません。母国への奉仕に人生を捧げる決意をしなさい。団結は第一の必要条件です。人々は偉人たちの誕生日を祝いますが、偉人の教えを守ろうとする人はわずかしきません。誕生日を祝うことは、何もすばらしいことではありません。偉人たちの教えを理解し、それに従って行動するために、あらゆる努力を払わなければなりません。

愛の質を高めなさい。あなたの生活のすべてを愛で満たしなさい。これは、前のユガ〔ドワーパラ ユガ〕でゴーピカー〔牧女〕たちがクリシュナに宛てた祈りです。愛のない生活は、まったく不毛です。人間は愛の化身です。愛は、真実のものへと向けられなければなりません。そのような愛こそが、人間

の生命の息吹なのです。

バーラタが受け継いできた財産でハートを満たしなさい

神聖アートマの化身である皆さん！ 愛を神性の神髄と見なして、社会への愛の奉仕に従事しなければなりません。あなた方は、バーラタの栄光を取り戻さなければなりません。バーラタは、過去において、ずっとすべての国の教師でした。他国のあらゆる人々が平和と悟りを得るためにやって来ています。このような状況の中で、バーラタ人自身が自分たちの偉大さを意識していないことは、大きな不幸です。バーラタ人の歴史は、肉体的、心的、霊的、その他、生活のあらゆる側面におけるバーラタ人の功績を反映しています。私たちは、受け継いできたその財産で自分のハート満たさなければいけません。

今、私たちは、物質的で世俗的な快適さのために人生を捧げています。そうした備品はすべて、何の役に立つのでしょうか？ 私たちは、永続的な至福の源であるアートマ原理を悟らなければなりません。ハートに愛がないなら、どんなに知識を得ても、どんなに地位を得ても、何の役にも立ちません。知識を追い求めるよりも、善い性質を身につけることの方が大切です。

神の愛という磁石

今日、なぜこれほど多くの人々がここに集まっているのでしょうか？何か抗しがたい理由があるに違いありません。皆さんは、自分の地元では見つけれない何かを求めているに違いありません。もし地元で欲しいものを見つけることができれば、高い旅費を払う必要はないでしょう。ここには神の愛があります。神の愛という強力な磁石が、人間の形をしたすべての鉄粉を引き寄せているのです。招待状は、誰にも、一枚も送られていません。来るように頼まれた人は誰もいません。人々をここに引き寄せたのは、神の愛の力であり、ハートを結びつける絆です。そのすべての根底にあるのは清らかさです。清らかさがある所には愛が育ちます。清らかさと愛が一緒になると、そこにはアーナンダ（至福）があります。どんな行いをしようが、どんな供儀を執り行おうが、愛がなければ、それらはあまり役に立ちません。

ヨーガの訓練では、いくつかの種類の呼吸法が取り入れられています。また、クンダリーニーヨーガの訓練も行われています。これらはすべて、ビジネスの一形態です。呼吸法では、息を吸うことはプーラカム、吐くことはレーチャカム、息を止めることはクンバカムと表現されます。これらはヨーガの力を得るための手段にはなりません。善いものをすべて吸い込むことがプーラカムです。悪いものをすべて

手放すことがレーチャカムです。善いものをハートに留めておくことがクンバカムです。誰にもこの種のヨーガを実践する資格があります。この神聖な種類のヨーガは、すべての人が実践すべきものです。これは、すべてのバーラタ人の第一の目標です。

ここプッタパルティは小さな集落です。この村は、どのようにして今の傑出した状態になったのでしょうか？その答えは、各自が自分で見つけることができます。それはヨーガであるとか、大きな幸運であるとか、運のいいハプニングであるなどと考えるべきではありません。それは、思考の力によるものです。あらゆる神聖な思考には、成就を見いだす力があります。だからこそ、ヴェーダーンタはこう宣言しているのです。

ヤッドヴァーヴァム タッドバヴァティ
(その人が考えるように、その人はなる)

ですから、誰もが善い思考を身につけるべきです。そうすることによって、その果報を手にする権利を得るようになるのです。

困難に順応するのは苦行の一形態

神の愛の化身である皆さん！このプラシャーンティ ニラヤムには十分な施設や便利さはありません

が、生活を便利にするさまざまなものに慣れている多くの皆さんがここに集まっています。皆さんは、あらゆる不便さに自分を適応させる一種のヨーガに身を投じているのです。その経験をサーダナ（霊性修行）と考えるべきです。あらゆる快適さを楽しむことはサーダナにはなりません。困難があるからこそ、幸せを感じるができるのです。困難を通ることなく幸せを実現することはできません。そうした困難は苦行の一形態と見なされなければなりません。楽な生活は苦行になりません。実際のところ、これほど多くの人々が多くの困難や不自由を我慢してここに集まっているというのは、彼らの一体感の顕著な証です。

何を達成するにも人間の努力が必要です。この20年間、プラシャーンティ ニラヤムの宿泊施設やさまざまな設備が充実してきたのは、ジョーガ ラーオの働きによるものです。セントラル トラストのメンバーとして20年間、彼はプラシャーンティ ニラヤムにそうした改善をもたらすために、昼夜を問わず絶え間なく努力を続けてきました。彼はカルマ ヨーギ〔行いを通じて神との合一を果たす行者〕です。仕事に喜びを感じています。しかも、この12ヶ月間、彼が昼夜を問わずたゆまぬ努力を続けてきたことは、私だけが知っていることであり、他の誰も知りません。彼はジョーガ ラーオ大佐ではありません。ジョーガ大佐とは呼ばれていますが、彼はまさにカ

ルマ ヨーギなのです。この1ヶ月間、彼は一睡もしていません。彼は82歳です。その年齢でなお、彼が人々に可能な限りの快適さを提供するために尽力してきたからこそ、帰依者たちは困難を乗り越えることができているのです。ジョーガ ラーオの奉仕に感謝するために、セントラル トラストのメンバーたちは、彼にふさわしい栄誉を与えることにしました。私は、ジョーガ ラーオを他人だとは思っていません。しかし、義務としてすべきことはあるので、ジョーガ ラーオに敬意を表すことで、セントラル トラストはその義務を果たすことになります。

(ここでバガヴァンは、ジョーガ ラーオ大佐の手首に金の丸いカディヤム〔腕輪〕をはめられました。ジョーガ ラーオ大佐が神聖な御手からカディヤムを受け取るために登場した時、会場全体が歓声に包まれました。バガヴァンはジョーガ ラーオ大佐に小声で、同じ活力で善い仕事を続けていくようにとおっしゃいました。)

今後、バーラタには、ジョーガ ラーオのようなカルマ ジーヴィ〔行いの人〕やカルマ ヨーギがもっと大勢現れるべきです。誰もがカルマ ヨーギになるべきです。そのカルマ〔行い〕はダルマへと変わります。そのカルマは人生を聖化するでしょう。

バーラタは貧しい国ではない

神への信仰を培い、カルマ ヨーガに没頭し、自分の人生を神聖なものにすることは、すべての人の義務です。バーラタ人は皆、バーラタの神聖さを忘れてはなりません。バーラタは決して貧しい国ではありません。この事実気づいていないから、この国は争いと無秩序に満ちているのです。一過性のものと永続的なものとの区別がつかず、人々はつかの間の快樂を追い求めて人生を台無しにしています。ささいな一瞬の利益のために、人々は永続的な価値を持つものを犠牲にしています。

自由を手に入れた当時は、人口の13%しか後進〔進歩や発展が遅れていること〕と見なされていませんでした。その割合は年々増加し、今では80%になっています！ 5年か6年後には100%になるかもしれません！ これはまったく正しいことではありません。

バーラタは後進の部類の人々で構成されている国ではありません。つまらない利権目的で、このような分類がなされているのです。諸外国は、バーラタを貧困に苦しむ国として見えています。神の愛の化身である皆さん！ バーラタは豊かな土地であることを覚えていなさい。バーラタほど資源に恵まれた国はありません。なのになぜ、私たちは自分たちを貧しい国と呼ばなければならないのですか？ それだけではありません。教育と医療の分野でも、私たちは犠

牲の精神を育てなければなりません。

誰もが無料で教育を受けられるようにする

皆さんは、一ヶ月前、多くの学生が（焼身自殺をして）命を落としたことを知っていますね。その理由は何でしょう？ それは、共同体単位での制限制度に対する抗議でした。私たちは、すべての人が自由に教育を受けられるような制度の普及を目指さなければなりません。教育は学ぶためのものでなければなりません。そうなれば、学生たちの間でこのような問題が起こることはないでしょう。

今日、ここに、インド大統領、アーンドラ プラデーシュ州の首相と州知事、その他の著名人たちが列席しています。教育界において、「遅れている」とか「進んでいる」といったような新たな分類を設けず、貧富の区別のない、万人のための無料の教育システムを確立すれば、国家は飛躍的な発展を遂げるでしょう。私たち〔国〕は何千万ルピーというお金を〔多くの見込みのない投機的事業に費やして〕無駄にしています。もし子どもたちに正しい未来を保証するなら、国家は限りない恩恵を得るでしょう。どの霊性団体も無料の教育を提供すべきです。

ティルパティ デーヴァスタナム〔ティルマラにあるヴェーンカテーシュワラ寺院を管理する世界第二

位の信託]が豊富な資金を持っていることはよく知られています。なぜその当局は無料の教育を提供しないのでしょうか？何億ルピーが無駄になっているのでしょうか？教育が無料でないから、デーヴァスタナムの教育機関に通う学生は誰一人として寺院に足を運ぼうとしないのです。それでどうして信仰心が育つのでしょうか？主の御名において、無料の教育と医療の救済を提供すべきです。

10億ルピーの病院プロジェクトの目的

このことを考慮して、私たちは昨日、ここに大きな病院を建てることを決めました。多くの人たちは都心に病院を建ててほしいと私に訴えてきました。いくつかの都市では、ビジネスとして多くの医療機関の運営がなされています。何か教育機関や医療機関ができると、そのもっぱらの目的は、ビジネスです。貧しい人々に無料で施設を提供するための事業を始めようとする人はほとんどいません。ですから、私たちは当初から、プラシャーンティ ニラヤムの近くに10億ルピーの病院を建てることを決めたのです。ここでは、高等教育が無料であるのと同じように、「高等医療」も無料になります。人々は、アメリカ合衆国で行われているような心臓外科手術を受けるために、何10万ルピーというお金を払っています。ですが、貧しい人たちはどんな有り様ですか？誰が貧しい人たちの面倒を見るのですか？都会へ行った

としても、貧しい人たちは「色つきの水」（薬剤の混合液）さえ手にすることはないでしょう！

こういった現実を鑑みて、私たちはこの病院建設プロジェクトを立ち上げました。心臓バイパス手術であろうと、腎臓移植であろうと、肺の手術であろうと、脳外科手術であろうと、すべてが無料で行われます。このことは、プロジェクト開始当初から決まっていたことです。この病院は1991年11月22日に開院します。誰もサイ サンカルパ〔サイの意志〕を押し測ることはできません。銃が発砲される時には光と音が同時に発せられるように、サイの場合は、思いと行いは同時に起こります。ですから、サイの決意を理解するのは、誰にとっても、たやすいことではありません。

サティヤ サイの英雄物語

神の愛の化身である皆さん！私がこれから言うことを大げさだと思っはなりません。私には利己心のかけらもありません。私がすることは何であれすべて、他の人々のためだけです。私は皆さんを「他人」と思っはしません。あなた方はすべて私の民です。これほどのすべてを包み込むような気持ちは、世界中どこを探しても見られるものではありません。あなた方は、50年間でこれほどまでに成長した組織を他に見たことがありますか？

これまでのアヴァター〔神の化身〕たちの場合、その名声が広まったのは、もっぱらそのアヴァターが亡くなったずっと後でした。現在のアヴァターの場合は、アヴァターが活着している間に、大学、大病院、飛行場をはじめとする多くの施設が村人たちのために建設され、今後もさらに多くのものができるでしょう。

多くの人々は、どうしてこういった一切が成し遂げられるのかと不思議に思っています。（このアヴァターの）降臨は今から64年前に起こりました。それ以来ずっと、この手は、どんな時にも、誰かに何かを求めるために伸ばしたことはありません。私は誰にも何かを求めたことはありません。これからも決して求めたりはしないでしょうし、そのようなことは決して起こらないでしょう。では、一体どうやって一切が成し遂げられるのでしょうか？バーラタでは、善良な仕事には、障害となるものはありません。あなたが心の底から何か善い仕事をしたいと思ったときには、お金はふんだんに流れてきます。心の狭い人は、どんな仕事を始めても、決して満たされることはないでしょう。心の狭い人は、大きな心、広い心を持った人の行いを理解することができません。

神の愛の化身である皆さん！私は皆さんに何かを期待しているわけではありません。ただ、あなたの

ハートの中に愛を育てなさい。すべての人をあなたの兄弟姉妹だと思って扱いなさい。すべての人を神の子であると認識しなさい。誰に対しても敵意や憎しみを抱かないようにしなさい。誰の気持ちも傷つけてはなりません。そうした大きな心の態度こそが、あなたに限りない至福を与えてくれるのです。もしあなたがスワミの誕生日を祝ってくれるのなら、これが、私にあなたに望むすべてです。あなたの方で一体性を持ちなさい。バーラタの栄光をよみがえらせ、推進させるよう努力しなさい。

「私はいつも限りない喜びで満たされています」

ここへ来る途中、私は何人かから、「ハッピーバースデー！ ハッピー バースデー！」〔幸せな誕生日を！〕という言葉で挨拶されました。私はいつもハッピーです。私には「ハッピー」〔お幸せに〕という挨拶は必要ありません！ 「ハッピー バースデー」という挨拶は、ハッピーでない人に伝えなさい。私は限りない喜びで満たされています。私は今までどんな時も、どんな場所でも、心配を抱いたことはありません。その理由は何でしょう？ すべての物事は、過ぎ去る雲のようにはかないものです。なぜそれらを心配することがありますか？

誕生や死に直面したとき、舞い上がったたり落ち込んだりすべきではありません。私たちは裸でこの世

にやって来ました。この世を去る時、行き先の住所を親類縁者に残すことはできません。親類縁者が親類縁者であり続けることなどどうしてできますか？ そういったものはすべて、この世での現象です。生きている間ずっと、調和と同朋意識を持って生活を送るべきです。困難はすべて、神を黙想することによって乗り越えることができます。神を忘れて、世俗的な事柄にどっぷりと浸かりながら、あなたは何を達成するというのですか？ 神への揺るぎない信心を持ちなさい。カースト、宗派、国籍による差別に、いかなる余地も与えてはいけません。すべての名と姿は神のものです。あなたが目にするすべては、主の普遍なる姿の現れです。神への固い信心を持って、主の御名を唱え、あなたの人生をあがないなさい。

サティヤ サイ ババ述

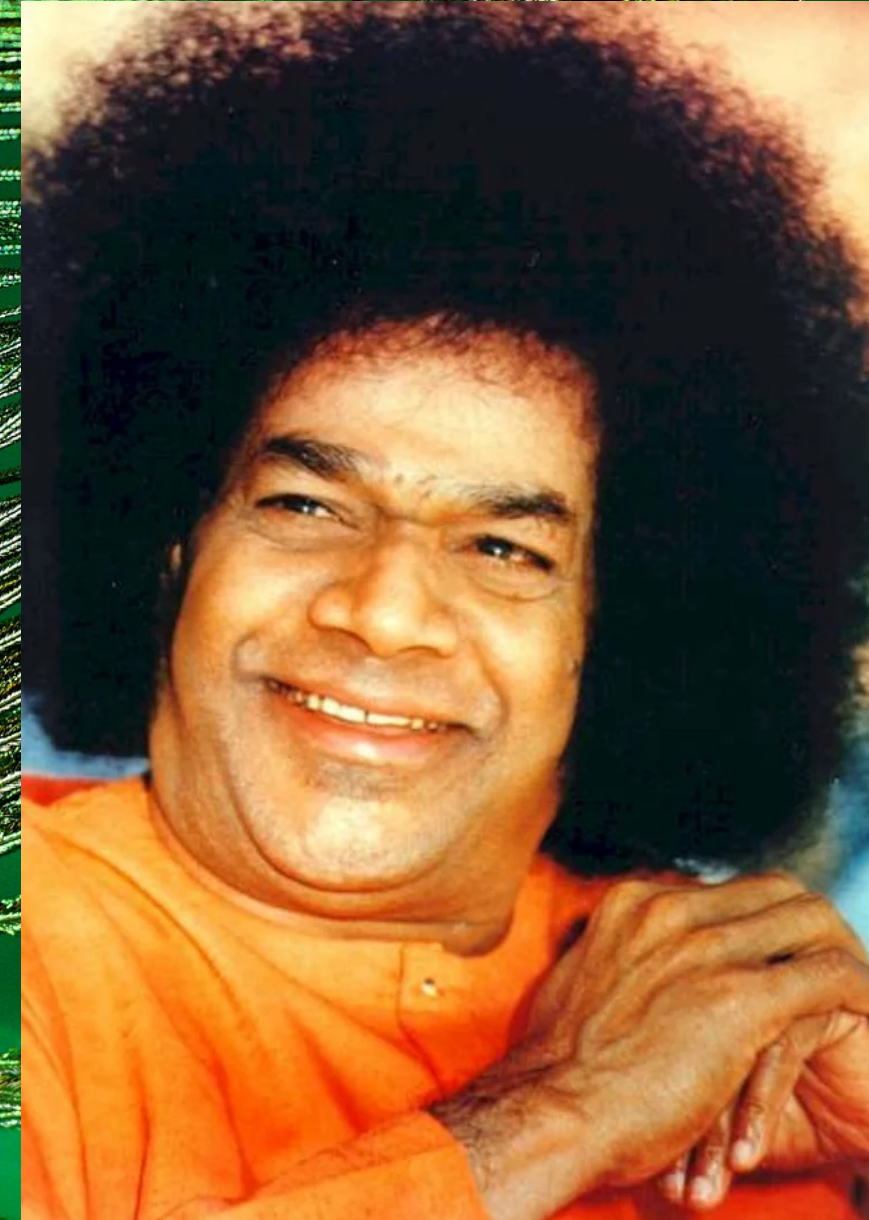
1990年11月23日

65歳の御降誕祭

プラシャーンティ ニラヤムの

サイクルワント ホールにて

Sathya Sai Speaks Vol.23 C34



シュリ サティヤ サイ ババ様 御生誕100周年記念ヴィジョン



ハートの中におられる神様を絶え間なく憶念し
人類同胞愛という一体性の花を捧げます



今ここに生きる

SSSIOJ会長 住友正幹



サイババ様は次のように説いておられます。
「現在というと、人は今の瞬間のことだけを考えるかもしれませんが。しかし、それは神が見ている現在ではありません。神にとって、現在(present)は遍在(omnipresent)です。これは、過去と未来はどちらも今あるものの中にあるという意味です。なぜなら、今あるものは過去の結果であり、未来の種だからです。人間は神の遍在を固く信じていないために、過去や現在や将来について思い悩むのです。神にとっては、時間の三つのカテゴリーは存在しません。」

1988年9月3日

クリシュナ神御降誕祭の御講話より

私たちは、過去という時があり、現在という時があり、未来という時があると信じています。しかし、過去は現在意識の記憶にすぎず、未来もまた現在意識の想像の中にあるのであれば、時は今しかないはずです。過去、現在、未来という直線的な時の流れという感覚は、すべてが移ろいゆくこの物理次元だけの感覚だといえるのでしょ

しかし、時は今しかありません。例えば、夜寝て目覚めれば明日かと想像することはできますが、明日、目覚めればその時は今なのです。同様に肉体を離れて来世に生まれ変わると想像はできても、実際に生まれ変わったとしたら、それはその時の今なのです。ですので、明日をどう生きるか、来世をどう

生きるかという質問は意味をなさず、今をどう生きるのかだけが私たちに問われることになるのでしょ

nowhere (どこにもない) という単語は now (今) と here (ここ) に分けることができます。つまり、私たちが生きることができるのは今ここを おいて他にはないことを暗示しているように思えます。

過去を思えば、あの時ああすれば良かった、こうすれば良かったという後悔の念が生じます。未来を思えば、この先いったいどうなるのだろうという不安や恐れが生じます。過去は過ぎ去り、未来はまだ来ていないにもかかわらず、人は後悔したり恐れたりしています。

また人は、過去にあった嫌な出来事が忘れられずにずっとそのことに苛まれ続けることがあります。例えば、誰かから罵詈雑言を浴びせられたとして、実際には、それはただ一度のことだったとしても、その後怒りや苦しみが続くのは、もはやその相手とは関係なく、自分の記憶が繰り返されているためです。人が何かについて考えたり感じたりする時に生じる体の反応は、それが今起きている現実か、過去の記憶かの区別をしません。



嫌な怒りや悲しみを繰り返していれば、その度に、体は防御のために動悸を早め、血圧を上げてしまいます。怒りは免疫力も下げってしまうといわれています。つまり、過去の出来事にとらわれていると心が傷つき、また体も傷ついてしまうのです。

ではその嫌な出来事を忘れることができるのかといえば、嫌な出来事というとらえ方のままでは、せいぜい気分を変えることはできても忘れることは簡単にはできないのではないのでしょうか？

そんな時にスワミの御言葉が役立ちます。

「過去を変えることができない」というのは私たちの常識ですが、スワミの説かれる「過去と未来はどちらも今あるものの中にある」という御教えは、過去に対する受け止め方は変えることができると説かれているようにも思われますが、どうでしょうか？

もちろん、過去の出来事という事実は変えることはできないでしょう。しかし、その出来事に対するその時の受け止め方と今の受け止め方では全く違ってしてしまうことがあります。

例えば、ある女性は、ある男性から結婚を申し込まれていたのですが、気乗りがせず承諾しませんでした。後に、あの時結婚していればよかったととても後悔することになりました。そのことがずっと心

に引っかかり、とうとう生きる意味さえ見いだせなくなっただそうです。

しかし、結婚を選ばなかったという事実は変わらないとしてもそれは神の計画であり、後になればそれが感謝に変わるかもしれないという見方を知り、受け止め方が前向きになったようでした。

もちろん、それは後にならなければ分からないことですが、実際そのような経験を多くの人がしているのではないのでしょうか？ 困難に出会ったお陰で今がある。もうどうしようもない八方ふさがりになったお陰でスワミに導かれたなど・・・。

そうであれば、人はどんな過去を引きずっていたとしても、それを「単なる悪しき出来事」とするのではなく、それは必ず、自分にとって必要な踏み石に違いないと信じれば前を向くことができるように思えます。

人生に正しい選択はありません。我々にできることは、自分が選んだ道をどう正解にしていくのかだけなのでしょう。

ハリール・ジブラーン(*)は「あなたの生き方は、人生があなたに何をもたらすかではなく、あなたが人生にもたらす態度によって決まります。あなたに

何が起きるかではなく、起きることをあなたの心がどう受け止めるかのよって決まるのです」と述べています。

では、「ここに生きる」とはどういう意味なのでしょう？ 私たちは、あの人のように、もっとお金持ちの家に生まれていればこんなに苦労しなかったとか、もっと健康に生まれていれば何でも好きなことができたのとか、もっと才能豊かに生まれていれば芸術家の道を歩めたのになどと想像します。

「ここに生きる」とは、そのような嘆きのような空想ではなく、自分に与えられた今のままの環境を是として生きるという意味でしょう。むしろ今の環境にこそ自分のなすべき課題や生きるべき意味があると了解することだといえます。

人は自分と他人を比べ、優劣を競い合い優越感や劣等感を作り出しています。それは「自意識」というエゴが生み出すものですが、自分は自分で良いのであり他人と比べる必要はありません。

神戸サイセンターで、ある身体障害者の施設で音楽セヴァとしてスマップの「世界に一つだけの花」を歌ったことがありました。この歌の歌詞は自分の人生を人と比べる必要はなく、自分に与えられた場所で自分の生き方を目指せば良いと歌われています。



「花屋の店先に並んだ、色々な花を見ていた。人それぞれ好みはあるけど、どれもみんな綺麗だね。その中で誰が一番だなんて争うこともしないで、バケツの中、誇らしげにしゃんと胸を張っている。それなのに僕ら人間はどうしてこうも比べたがる。一人ひとり違うのにその中で一番になりたがる。そうさ、僕らは世界に一つだけの花、一人ひとり違う種をもつ、その花を咲かせることだけに一生懸命になればいい」

以下はその時の音声記録です。

https://drive.google.com/file/d/1C2iy6ag_zDfp3WXDLS7KNRDnH13nSjlr/view?usp=sharing

今ここに生きるとは、そのように今に意識を定め、そして自分に与えられた今の環境を是として受け入れ生きることだといえます。

その現状を肯定する前向きな姿勢は必ず幸福をもたらすといえるでしょう。サイババ様は、「過去は過去です。未来は不確かなものです。ただ『今』だけが私たちの手の中にあります。今を生き、自らの喜びを同胞と分かち合うことが人間の第一の義務です」と言われます。



(*)ハリール・ジブラーン：

1883年1月6日生まれ。「20世紀のウィリアム・ブレイク」とも称され、宗教・哲学に根ざした、壮大な宇宙的ヴィジョンを謳う詩や絵画を残し、その作風は後世さまざまな詩人や政治家に影響を与えた。皇太子妃だった当時の上皇后美智子がレバノン大統領から贈られたジブラーンの散文詩集『預言者』を愛読し、相談役の神谷美恵子にも紹介。神谷が後に『預言者』の抜粋集を執筆するきっかけにもなった。
(ウィキペディアより抜粋 2022年9月14日)



サッティヤム シヴァム スンダラム 5

第44回

病院は時が経つにつれ大きくなり、多くの献身的な医師と、医師以外の医療従事者、非医療従事者たちが、人々の体を治して魂を浄化するという使命を持って、病院に加わりました。毎年、さらに多くの設備機器が加わり、特に1979年以降、顕著になりました。1984年2月29日、マハーシヴァラートリの日、病院の南側の広い敷地に、新たに大きな建物が竣工し、病院に一般的な外科処置が導入されました。

ここで、この病院で死からよみがえり、寮監も目撃した驚異的な事例を紹介しましょう。1985年の早朝、プラシャンティ・ニラヤムの学生寮に住むナーラーヤナ・シャルマという研究生が、急性のぜんそくの発作で入院しました。病院長のチャーリ医師は衰弱ぶりを見て危機感を募らせました。麻酔医は酸素マスクを使って助けようとしてしました。シャーンター医師もその場に駆けつけましたが、心臓の鼓

動はなく、体はすでに青くなっていました。チャーリ医師は、シャーンター医師に「もうだめだ」と言って、マンディルのババの所へ報告に行きました。15分もしないうちに、彼はバガヴァンからのヴィブーティの包みを2つ持って戻ってきて、ババの指示どおりに研究生の胸に塗り、背中にはお湯を入れた湯たんぽを当てました。

研究生の様子を見るために病院にやって来た寮監は、起こったことを知ると絶望し、マンディルに行きました。バガヴァンは断言なさいました。「あの子は良くなります。何も心配する必要はありません」

それから、寮監に熱いコーヒーの入った魔法瓶を手渡して、「彼に少しずつコーヒーをすすらせなさい」と、指示なさいました。寮監は病院に戻り、シャーンター医師にコーヒーを手渡しました。彼女は無表情で魔法瓶を受け取りました。後に本人が語ったことですが、彼女は心の中で、「死んだ子がどうやってコーヒーを飲めるのか?」とっていました。

心の中で祈りながら、なす術もなく遺体を見つめていると、研究生の足の親指が微かに動きました！私たちは心臓が止まるかと思いました！シャーンター医師が研究生の酸素マスクを外し、耳元でささ

やきました。「スワミがあなたのためにコーヒーを用意してくださったのよ。どうか飲んでちょうだい」彼女がコーヒーをスプーンで一口、研究生に含ませると、嬉しいことに、そして、驚いたことに、研究生は少しずつ飲み込みました。

シャーンター医師が研究生の腕に血圧測定用の布を巻き付けていると、バガヴァンが病室に入ってきました。バガヴァンは微笑んで、医師にお尋ねになりました。「彼は死んだのではないですか？なのに、どうして血圧測定用の布を巻こうとしているのですか？」

バガヴァンの声を聞いて、研究生はどうにかこうにか自分の目を開きました！ババは彼のそばに行かれ、からかわれました。「君はまだ生きているのですか？みんなは君が死んだと言っていますよ！」ババはチャーリ医師を見て、「彼が死んでいたというのは本当ですか？」とお尋ねになりました。「はい、スワミ」と、チャーリ医師は答えました。

シャーンター医師が付け加えました。「スワミ、脈もなければ、まったく呼吸もしていませんでした。心臓の鼓動も聞こえず、血圧も感じ取ることができませんでした。それで私たちは、彼は死んだという結論を下したのです！」

バガヴァンは微笑んで手を回されました。四角く茶色っぽい、チョコレートのように見えるものが手の中に出現しました。バガヴァンはそれを研究生の口に入れ、かむようにと言われました。

ババは医師に脈と血圧を測るようにおっしゃいました。どちらも普通の状態に戻っていました。ババは寮監たちの方を向いて、「あなた方は信じますか？ 死んだ子が生き返ったのです！」とおっしゃいました。寮監たちは、「はい、スワミ」と、言いました。ババは医師たちにも同じ質問をなさいました。全員が、「はい、スワミ」と、答えました。医師の一人が、「ババ、あなたは神様です。あなたは何でもおできになります！」と、言いました。「あなた方には、そう思うほどの信心がありますか？」と、バガヴァンがお尋ねになりました。「はい、スワミ！」と、皆、一斉に答えました。「そうです。彼は死にました。私は彼に第二の人生を与えました！」と、ババはさらりと明かされました。

大勢の男子学生が心配して外で待っていました。ババは寮監に、自分が見たことを説明するようにおっしゃいました。学生たちは、良い知らせを聞いて喜び、嬉しそうに寮に帰っていきました。

ババは、ヒドロコルチゾンの点滴を打つようにと医師たちに言い、マンディールへ戻られました。しば

らくすると、ババは、適量を服用させるようにと、ご自分が物質化なされた錠剤の瓶を3つ届けさせました。研究生の青年は夕方には回復し、ババの指示により、退院しました。



プラシャーンティ・ニラヤムの
ジェネラル・ホスピタル〔総合病院〕の新しい建物



ババとジェネラル・ホスピタルの医師たち

サイと共に

1998年7月19日の会話



スワミ：不運な男子諸君。私はプールナチャンドラ講堂で準備万端でした。私は12時に寮に電話をしました。スーリヤナーラーヤナ、つまり君たちの会計士（プラシャーンティ・ニラヤムのシュリ・サティヤ・サイ・ホステル〔学生寮〕で15年以上経理を担当している人物）が電話を取りました。私が寮監（シヴァ・シャンカラ・サイ博士）はいるかと尋ねると、いないという返事でした。私は再び1時半に電話をしました。同じ結果でした。君たちの昼食は何時ですか？

学生たち：12時です、スワミ。

スワミ：ああ！だから彼はいなかったのですね。しかし、1時半にはどこにいたのでしょうか？私は男子学生は寮に知っていることでしたが、その時、全員（いびきの音を立てて）寝ていました。男子たちは寝ている間、それぞれ別の方向に足を向けていました。ある学生の足は、かばんの上に乗っていました。誰もが違う種類の音を出していました。あの寝相は何ですか？私はこれまで一度もあのような寝方をしたことはありません。夜中の1時や2時でも、あのようなことはありません。

以前は、私は自分でプッタバルティからラジャームンドリーまで〔約678キロ〕車を運転していました。去年も、コダイカナルへの旅の最中、私は車の運転をしました。私はパドマナーバンがしていた話に耳を傾けました。何年前か、パドマナーバンの父親（バンガロールの歯科医）のシェーシャギリ・ラーオが、私と一緒に車に乗っていたことがありました。彼は〔怖がって〕旅の間ずっと目をつぶって「サイラーム、サイラーム」と唱えていて、目的地に着いてから、やっと目を開きました。私はそれくらい猛スピードで運転していたのです。私の車はモーリス〔イギリスの自動車メーカー〕のターナーでした。とても小さな車でした。私はよく時速100~150kmで走っていました。しかし、あの種の車は普通、馬力はあまりありません。そのスピードでは、タイヤはほとんど宙に浮いていました。そんなスピードでも、私は一度も犬や猫をひいたことはありませんでした。私はとても若い時に免許を取りました。試験の最中、当時のマドラス州の運輸総監だったハヌマント・ラーオと2人のブレーキ検査官が、私の車に同乗していました。彼らは私に2本の線の間を、前進と後退で走るようにと言いました。彼らは急に、右に曲がれとか、

左に曲がれなどとも言いました。私はまだ年が若かったのですが、試験の後、彼らは特別免許を発行してくれました。「彼は50年運転経験のある者よりも上手に運転できる。若いのに、こんなに上手に運転できるなんて」と彼らは言いました。

学生たち：どうか、スワミ。

スワミ：しかし、私には時間がありません。

教師：すべての時間はスワミのものです。

学生たち：どうか、スワミ。

スワミ：今なら話ができます。学生諸君、準備はいいですか？

学生たち：（大きな声で）はい、スワミ。今すぐ私たちを呼んでください。

スワミ：いや、だめだ。君たちは夕方、特別授業があります。
（教師に）見ていなさい。男子たちは「いいえ、スワミ」と言うでしょう。

教師：もしスワミがお望みなら、何でも可能です。

スワミ：時間がありません。

教師：スワミ、どうか木曜日に私たちに話をしてください。

スワミ：木曜日は、私は暇ではありません。仕事があります。

学生たち：どうか、スワミ。明日、私たちに話してください。

スワミ：明日は月曜日です。不可能です。

学生たち：スワミ、今日の夕方、私たちを呼んでください。

スワミ：だめです。今の時点で可能なのは次の日曜日だけです。彼は大学に来ましたか？ 彼の名前は？ アブドゥル・カラーム？

学生たち：はい、スワミ。

スワミ：彼はとても優れた詩人でもあります。彼がインタビュー・ルームに入った時、彼はスワミを見て、「カラームはババにサラーム

（挨拶）を捧げます」と言いました。彼は、仕事を終わったらここに来て、残りの人生をここで過ごしたいそうです。彼は未婚で、子供もいません。ですから、ここに来てここに落ち着きたいのです。彼は、ここに来て、学生に教えて、自分の時間を学生と過ごしたいと言っています。彼は、男子学生に多くのインスピレーションを与えてくれるでしょう。私は彼に、「それはあなたが望んでいることです。何でもあなたの望むことをしなさい」と言いました。

（ある教師に向かって）こっちに来なさい！ あなたは小さなロード・ローラー〔地面をローラーで押し固めるための大きな丸いタイヤのついた機械〕のようです。太りすぎです！

教師：スワミ、私は痩せてきました。

スワミ：あなたは罪悪感を感じているのですか？ 食べに食べています。両手で食べています。

教師：スワミ、私は少ししか食べません。ヨーガ（霊性修行）のおかげです。

スワミ：それはヨーガではありません。それはロー

ガです。男子たちはどうですか？

教師： 学生たちはとても良いです。優しいです。バガヴァン、どうか大学1年生にちょくちょく話しかけてください。彼らはとても喜ぶでしょう。彼らはそれを必要としています。

スワミ： 見てみましょう、見てみましょう。あなたはどの科目を受け持っていますか？

教師： MBA〔経営学修士課程〕の1年生のセルフアウェアネス〔自己の気づき〕です。

スワミ： 「セルフ」(Self)とは何ですか？

教師： 「セルフ」とはアートマン〔真我／アートマ〕のことで、それはどこにでも存在しています。それが私たちに話させたり見させたりしているのです。

スワミ： 空気はどこにでもあります。それと同じく、意識もどこにでも存在していて、あなたと共に、あなたの中に、あなたの周りに存在しています。しかし、あなたはそれを捕まえることができません。コンシャス(意識)、コンシャスネス(気づ

き)、コンシャンス(良心)。「気づきに意識を向けるために、良心に従いなさい」

(スワミはプラシャーンティ・ニラヤム・キャンパスの寮監であるシヴァ・シャンカラ・サイ博士の所に行かれ、男子学生たちにスワミが午後に彼ら呼んだことを確認なされた。すると、寮監はスワミにプールナチャンドラ・セッション〔スワミによる特別な教えと交流の機会〕を依頼した)

Students With Sai: Conversations 1991 to 2000
pp.228-230より

(参考)

アブドゥル・カラーム：インドの人工衛星やミサイル開発に貢献する科学者であり技術者。この対話後の2002年に第11代インド大統領となった。





帰依者インタビュー - 私の旅 - 第8回

サティヤ サイ 出版協会 代表理事
比良 竜虎

日本での活動

今回は、私がスワミに日本でどのような活動を行えば良いのでしょうかと、伺ったときの話をしましょう。

最初に言われたことは、ガーヤトリー マントラを教えなさいということでした。そこで、マントラの録音テープや小冊子を作り、日本各地でマントラの講習会を開きました。また、サーダナキャンプでも、ガーヤトリー マントラをテーマにした勉強会を繰り返

返し行いました。今から振り返ってみると、私たちがヴェーダを学ぶ前に、ガーヤトリー マントラを学べたことは、とても大切なプロセスになりました。

また別の機会に、日本でどのような奉仕をすれば良いのでしょうかと、スワミに伺いました。その時、スワミは少しお考えになって、次のようにおっしゃったのです。

One cup of milk is better than two cups of wine.

(一杯のミルクは二杯のワインよりも良い)

Two cups of wine are better than one cup of milk.

(二杯ワインは一杯のミルクよりも良い)

せっかく教えを頂いたというのに、スワミのおっしゃる言葉の真意が、その時の私には理解できませんでした。その後、インドからの帰りの飛行機でたまたま読んだ新聞に、世界保健機構と日経新聞が主催する、日本のアルコール問題に関するシンポジウムが開催されるという記事が目にとまりました。とても偶然とは思えず、そのシンポジウムに参加することにしました。

そこで私は、日本は人口一人当たりのアルコール消費量が世界で最も多いこと、飲酒による健康問題や社会問題が増えていることを知りました。当時は、高校の近くにもお酒の自動販売機があり、高校生でも簡単にお酒を購入できる環境にありました。酒税

は国にとって大切な財源の一つなので、お酒の販売を制限することは簡単ではないようでした。しかしながら、このときの提言がきっかけとなり、その後、学校から一定の範囲内には、お酒の自動販売機を設置できない法律ができました。

シンポジウムに参加して、私はスワミから頂いた言葉の意味を理解しました。お酒で健康を害しては、霊性どころではありません。そこで、健康に関するセヴァを行うことにしました。「霊性と飲酒 Spirit & Spirituality」というテーマを掲げて、飲酒による社会問題に取り組む団体と共催で、横浜のサンモール・インターナショナル・スクールにおいて展示会を行いました。



展示会では、飲酒運転によって子どもを失った母親たちの講演会なども企画しました。また、ゲストスピーカーとして、スワミの帰依者であり、アメリ

カにおけるドラッグやアルコールなどの社会問題に詳しいビル・ハーヴィー医師をお招きして、アメリカの実情について講演をしていただきました。



その頃の日本では、飲酒だけでなく、喫煙による健康への影響も社会問題となっていました。日本は喫煙者が多く、仕事上のおもてなしとして外国の高級な煙草をお客様に勧めることもありました。今日、日本でのアルコール消費量や喫煙人口は、当時と比較するとずいぶんと減ってきましたが、人々の健康意識が高まってきたことは、ババ様の恩恵だと思えます。肉体が浄化されて初めて、次のステップとして精神的な世界に入っていけるのではないのでしょうか。

ヴェーダの浸透

ババ様が、この世に降臨された使命の一つは、世界中にヴェーダを広めることだと言われています。ババ様のご意志により、日本でもヴェーダを学び唱えることが始まりました。ヴェーダは精神的な活動の基礎であり、その基礎ができたうえで、さまざまな精神的な道を選ぶことができます。

今から7、8年前には、300名ほどの日本人帰依者が、テキストを見ずにヴェーダを唱えることができるようになりました。これは奇跡的なことです。日本のいくつかの国立大学や仏教系の大学でも、ヴェーダを学問として教えていますが、精神的な観点でのヴェーダの習得は期待できません。ヴェーダを教える教授が肉食を行っていることから分かります。

ババ様の意志のもとにヴェーダが浸透していくことは、日本にとって大きな国益となるでしょう。奈良時代、天然痘のために多くの人々が命を落としましたが、人々は仏教でその国難を乗り越えました。日本は徳高い国ですが、その徳を実行できる社会にならないといけません。私は、今後300年ほどかけて、日本も大きく変わっていくのではないかと思います。今日、日本が直面しているさまざまな課題も、必ずやヴェーダによって克服されることでしょう。

比良 竜虎（ひらりゅうこ）プロフィール：

1948年インド共和国ラージャスタン州ジャイプルで誕生。シニアケンブリッジ（ムンバイ）卒業。その後日本に移住し、1976年日本に帰化する。

1978年からサイセヴァを始め、全国のサイセンター、サイグループの発足に貢献。東京サイセンター初代会長、サイラムニュース初代編集長、シュリサティヤサイ国際オーガニゼーション ジャパン (SSSIOJ) 会長、SSSIO ゾーン5（中国、台湾、香港、日本、韓国）コーディネーター、SSSIO B地区（世界80か国）会長を歴任。現在は、シュリサティヤサイセントラルトラスト理事、SSSIOJ相談役、サティヤサイ出版協会 代表理事、サティヤサイ教育協会 理事長。

来日以来、日本で複数のビジネスを立ち上げ、現在はHMI（株）ほか数社の代表取締役を務める。日印の文化・経済・親善交流促進にも尽力し、さまざまな活動に携わる。公益社団法人在日インド商工協会 会長。財団法人日印協会 理事。

長年にわたる観光産業の発展、日印親善、インド哲学・文化伝承活動における功績が認められ、インド政府から2010年1月にプラヴァシー・バーラティヤ・ディヴァス賞を、2022年3月にパドマ・シュリー勲章を受章。

ベジタリアン クッキング

練りごま入りほうとう



材料（2人分）

じゃがいも … 1個
 ごぼう … 1/2本
 大根 … 5cm
 にんじん … 3cm
 かぼちゃ … 1/6個
 長ねぎ … 1/2本
 こんにゃく … 1/3枚
 油揚げ … 1枚
 ほうとうの半生麺、または市販のゆでうどん・冷凍
 うどん（平たい形状が良い）でも可 … 2玉
 ごま油 … 小さじ2
 水 … 4カップ
 味噌 … 大さじ1～大さじ1と1/2
 練りごま … 大さじ1
 すりごま … 大さじ2～3
 醤油 … 大さじ2
 みりん … 大さじ1

1. 下ごしらえ

- 油揚げは、熱湯をかけて油抜きして軽く絞り、キッチンペーパー2～3枚で包み水気を切る。
- こんにゃくは、塩でもみ、熱湯をかけ、あくぬきをする。

- じゃがいもは、皮をむいて一口大に切り、水にさらしてから水気をよく切る。
- ごぼうは、よく洗ってから皮のついたまま、ささがきにする。水にさらしてから水気をよく切る。
- 長ねぎは、斜め切りする。
- 大根は、皮をむいて5mmの厚さのちょう切りにする。
- にんじんは、皮をむかず5mmの厚さのちょう切りにする。
- かぼちゃは、種を取り、煮くずれない程度に少し大きめに切る。

2. 炒める

鍋に油を熱し、ごぼう、にんじん、じゃがいも、大根、こんにゃくを炒める。

3. 煮る

4カップの水を加えて、沸騰したら弱火にしてアクをと きどき取りながら、具材がやわらなくなるまで煮る。

4. ほうとうを煮込む

下ゆでした半生麺のほうとう（またはゆでうどんや冷凍うどん）を入れて更に煮込み、火を止める5分前位にかぼちゃ、油揚げ、ねぎを入れる。ほうとうと野菜がほどよく煮えたら味噌、練りごまを溶かし入れ、仕上げにすりごまをかけていただく。

【レシピのポイント】

○山梨県の郷土料理ほうとうは、小麦粉を練って切った太くて平たい麺を、かぼちゃや野菜とともに味噌を使った汁で煮込む料理です。野菜をたっぷり加えて、昔はうどんを各家庭で手打ちをしていたそうです。外食産業もない当時は、沢山作って毎夜、囲炉裏を囲みました。自家製味噌を楽しみながら、近所同士互いにもてなし振る舞ったそうです。

○現在では山梨県を中心として、ほうとう専用の生麺や半生麺が販売されており、それを使用する機会が多いですが、今回は手に入りやすい市販のゆでうどん・冷凍うどんなどを使って、どのご家庭でも簡単に作れるレシピとなっています。動画ではほうとうの半生麺を下ゆでして作っています。

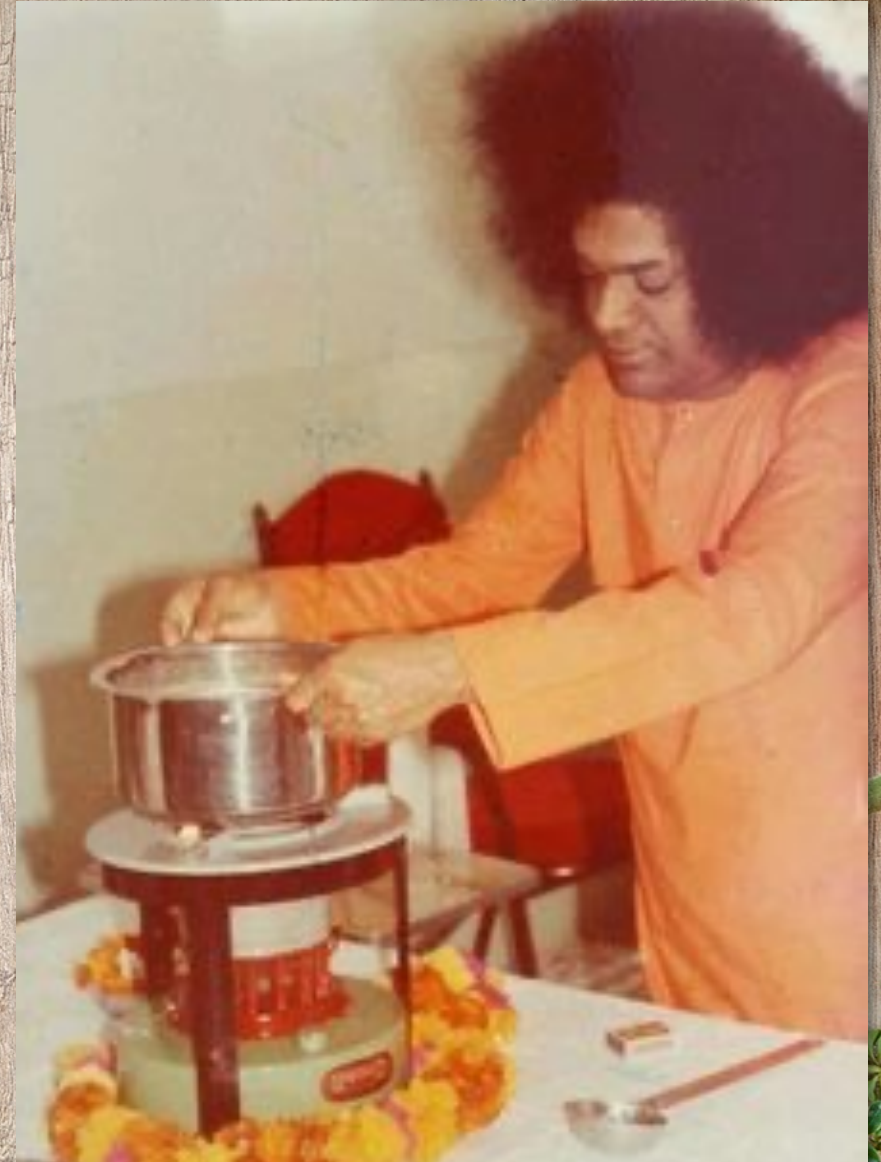
○栄養豊富で身体も温まり、寒い冬には最適なこのほうとうに練りごまを加えて、更にコクを出すと、ベジタリアン料理でも満足感が味わえる一品に。

○お好みで、山椒、ラー油、生姜などで味変をしても。野菜は上記以外の冷蔵庫にある残り野菜でも大丈夫です。

ババ様の御言葉

「神の栄光を大きな声で歌い、大気を神への崇拝で満たしなさい。雲は雨を通じて、その神聖さを地上に注ぎます。作物はその雨を糧として実り、食物を神聖で力あるものにします。そのような食物は、人に神への思いを強く抱かせます。これが進化の鎖です」

1968年7月8日



ワカチンナカタ

グルダクシナー



これは、クリシュナとバララーマが偉大な聖者であるサーンディーパニのもとで学んでいた頃のことです。二人は理想的な生徒として振る舞い、尊敬と畏怖の念を持ってグル〔師〕に仕えていました。さらに、二人はこの聖者に対する愛情と忠誠心も欠けていませんでした。

ある日、クリシュナは師のもとを訪れて言いました。「ああ、賢明なお方よ！ 私たちがあなたとお話ししていると、時折、あなたの目は涙であふれることがあります。この悲しみには何か深い訳があるはずです。その理由を教えてください。師の心〔ハート〕に喜びを取り戻すことよりも気高い、価値ある奉仕の行為などありえませんか。どうかためらったり、疑ったりしないでください」

サーンディーパニは二人の兄弟を近くに引き寄せ、自分のそばに座らせて言いました。

「子供らよ、おまえたちがこのアシュラム〔修道場〕にいただけで、私はとても嬉しく思っている。私は、死んでしまった息子のことを思い出していたのだ……。そう告げると、サーンディーパニは泣き崩れました。バララーマは、師の足もとにひざまずいて言いました。「グルジ、教えてください。ご子息に何が起こり、今、彼はどこにいますか？ 私たちがきつとご子息をあなたのもとに連れ戻します」

「子供らよ、何年もの長いタパス（苦行）の末、私はようやく息子に恵まれた。私はとても気を配って息子を愛情深く育てていた。ある日のこと、息子はプラバーサ・クシェートラに行き、海で聖なる沐浴をした。その沐浴の最中に溺れてしまったのだ。それ以来、私は慰めようもない悲しみに苦しめられてきた。しかし、おまえたちがアシュラムに来てからは大きな慰めと喜びを得た。おまえたちは善良で、謙虚で、規律をよく守った。私は寂しいのだ。というのも、1、2日中におまえたちはこのアシュラムを去らねばならないからだ。おまえたちは学ぶべきことをすべて学んだ。もうここには長くいられない。おまえたちが去ってしまえば、再び私は慰めようもない悲嘆に追い込まれることだろう」

クリシュナは立ち上がり、両手を合わせたまま断固たる口調で言いました。

「おお、最高の師よ！ 私たちの師であるあなたに、私たちは感謝の念を捧げなければなりません。あなたは私たちに優れた科学と芸術を教えてくださいました。自分の師を喜ばせることは、私たちの義務（ダルマ）ではないでしょうか？ 私たちは直ちにプラバーサ・クシェートラに向かい、ご子息を探してきましょう。ご子息を連れ戻すため、必要とあらば海を相手に戦い、死の神とさえ戦ってみせます。どうか私たちの旅路を祝福してください」。サーンディーパニは少年たちの試みが成功することを確信

しました。彼らが普通の少年でないことがわかってきたからです。そこで、サーンディーパニは少年たちを祝福し、二人が冒険に向かうことを許可しました。

バララーマとクリシュナは海へ急ぎました。岸边に立つと、二人は有無を言わさぬ大声で叫びました。「海よ！ 即刻、われらが師、サーンディーパニの息子を返すのだ。さもなければ、われわれが与える罰により、おまえは苦しむことになるぞ」。海はその言葉を聞いたとたん恐怖に震えました。海は忠誠心を表し、兄弟たちの前に現れました。海は兄弟の御足に触れて言いました。「お許してください、ああ、畏れ多き方々よ！ それは私の過ちではございません。あの少年が沐浴していた時、運命が彼を引っ張り、海の深みに連れて行ってしまったのです。そうこうしている内に、洞窟に住む人食い鬼のパンチャジャナが少年を飲み込みました。これが真実です。解決はあなた方にお任せいたします」

クリシュナは、この情報をくれた海にお礼を言うと、海の奥深くへ飛び込んで、人食い鬼の洞窟にたどり着きました。クリシュナは鬼の腹を引き裂きましたが、少年の亡骸（なきがら）を見つけることはできませんでした。鬼は少年を死の神に引き渡してしまっていたのです。クリシュナは、人食い鬼の胃の中に法螺貝（ほらがい）を見つけると、死の神の

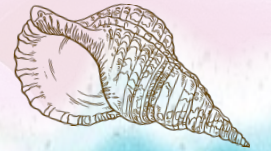
住処に向かいました。クリシュナは入口で法螺貝を吹き鳴らしました。死の神が兄弟の前に現れました。死の神はバララーマとクリシュナの兄弟を見て、丁重に尋ねました。

「なぜあなた方が私の住処においでになったのか、その理由を尋ねてもよろしいでしょうか？」。兄弟は、自分たちの師であるサーンディーパニの息子を連れてきて、自分たちの保護下に置くように命じました。ヤマ〔死の神〕は答えました。「それであなた方がお喜びになるのなら、もちろんそう致しましょう。手下どもが少年を連れてきて、あなた方にお引き渡し致します」。直ちに、クリシュナの手にサーンディーパニの息子が献上されました。バララーマとクリシュナは、少年を連れて師の草庵へ急ぎました。

二人は師の息子を師に引き渡し、言いました。「これは、私たちのグル ダクシナー〔師への謝礼〕です。私たちのした行為をそのようにお受け取りください」。サーンディーパニ夫妻の喜びは筆舌に尽くし難いものでした。夫妻は二人の兄弟を祝福しました。サーンディーパニは、このような神の化身たちを弟子に持つという途方もない自分の幸運を思い、喜びの涙を流しました。

アヴァター〔神の化身〕たちでさえ、師の偉大さを認識し、ウパニシャッドの教えである「アーチャ

ーリヤ デーヴォー バヴァ（師を神のように崇めなさい）」という教えに従って、世にお手本を示したのです。



『ワカ チンナ カタ』とは「ある小話」という意味のテルグ語で、ババ様が御講話の中で話された、たとえ話や物語です。



<活動報告>

スタディーサークル



開催日：2021年8月15日(日)

テーマ：1996年夏期講習ラーマーヤナ（サティヤ・サイ出版協会）より「ヴィッディヤーヴィッディヤールティ」（P11-13）

参加者：54名

質問：

- ① 知識の真の探求者とはどのような人か？
- ② どうすればそのような人になれるのか？
- ③ どのようなものが真の学びであり、そのような学びはどのように人生の見方を変えるのか？
- ④ 真の教育は人間性にどのような特質を与えることができるのか？

<参加者のコメント>

「去年からこのスタディーサークルに参加して随分考え方が変わった。やはり知識の探求は、単に本を読むだけではなく、熟読して自分の中で落とし込み、探究して考えて、それを行動に移すことが大切だと思う。」

「真の知識を探究する時の動機において、（真の知識の探求者は）謙虚にひれ伏して学んでいくような人のことではないかと思った。」

「ラーマクリシュナ・パラマハムサ※1が『Who am I?』という問いを絶えず繰り返していたというお話があったが、やはり真我の探求とは私自身の、つまり神性（霊性）を探究することだと思う。真の学びというのは、世俗的知識だけではなく、本当の自分が誰なのかという霊的知識を得ること。そういう学びや自己探求を続けることにより、世俗的な活動を続けながらも、基盤を霊性というものに置くようになると思う。だから人生の見方という意味では本当に霊性を基盤にして、価値のある人生になっていく。」

「神を手に入れるためには信愛が一番大事だというお話があったが、神への信愛を培っていく中で神を手に入れることができる。それが真の学び、あるいは人生の目的になる。」

「私自身は、スワミに出会う前は目に見えるものが絶対的存在であり目的でもあった。しかしスワミを知って得られた体験や学びは、感覚で知覚できる世界の出来事は永続するものではないことだ。実際、現実の社会生活の中では、目の前にあるものにどうしても影響されることもある。そういったものにどこまで惑わされないのかが自分の修行なのだろうと思う。」

「今日は8月15日で、日本においては終戦記念日。今日、家族とお墓参りに行ってきて思ったが、私たちは現代に生きているけれど、私たちの先祖から伝えられているような、古から伝わる英知を引き継いで大切に守っていくべきだと思った。私の母親は戦争で親を亡くしたが、隣に住んでいた家族が母を娘として育ててくれた。母いわく、『昔はどの家の子供でも大人が見つけたら、自分の子供として育てたものよ』と、あっけらかんと言っていて、寛容性というのは大切だなと思う。スワミは真の教育を受けた人の特質は、思いと言葉と行動が一致しているとおっしゃっている。本日8月15日はインドの独立記念日で、本当に良いモデルとしてはマハトマ・ガンジー※2。あの方は、本当に偉大なる魂の持ち主で、それだけでなく、人格のみならず、教育もしっかりと受けている。この世の教育もしっかり受けて、人格も整っていたので、あれだけの大きな偉業を成し遂げ、おかげでインドがイギリスから独立した。だから人格形成とこの世の勉強の両方が大切だと思う。」

「まず、知れば知るほど自分が無知であることがわかって、最初に謙虚さが身に着く気がする。その次に、すべてに神を見るようになれば、すべてに対する平等心と不動心をもてる気がする。」

<参加者のコメント>

「自分が人生に何を求めたいのかということに則して答えたいと思う。スワミ※3が何度も『神をあらゆる人の中に見なければいけない』と教えてくださり、自分がサイの学生だった頃に知識のレベルからそのことを学んだ。もしかしたら霊性探究の世界にいない人にとって『私たちのすべては神であって、本当は私たちは皆神なのだ』という真理は、非常にショッキングなことかもしれない。なぜなら人々は自分の外側に神を探し求める傾向があるからだ。すでに得た知識を実践し体験することが重要だ。体験は『実践すること』によってのみ可能ではないか。ではどのようにして、私たちはそれを実践できるだろうか？スワミは多くの御講話のなかで、私たちが絶え間なく統合意識の中に居ることによって、それができるのだと教えてくださっている。それは『Constant Integrated Awareness（以下CIA：絶え間ない統合意識）』

『同じ神が私たちのすべてに居て、私たちの内にも周りにもすべてに満ちている』ということ。例えばバギア先生は『私たちがいつも瞑想を続けていて、ある日、突然悟りが得られるわけではない』とおっしゃっている。それは突然ではなく、少しずつ覚めるのだということ。そのようにして『CIA』を実践していくのが体験に辿る手段。様々なことを急に学び取ることはできない。

少しずつ学んでいくこと。」

「私たちの皆がもっている二つの性質の一つは霊的性質で、もう一つは世俗的性質。その両方が私たちの中にある。そして世俗的な性質により物事への執着、その結果、不義を行ってしまったりする。一方、神聖な性質は、『親切』、『真実』などに則しており、すべての高尚な性質は霊的な特質に繋がる。霊的な求道者とは高尚な性質を得ることにエネルギーや努力を注ぐ人だと思う。実践していけば霊的な向上が得られ、内在する神性が現れてくると思う。そのためには霊的な事柄と世俗的な事柄とを識別すること。そして心をコントロールすることが主な方法論になってくる。霊的求道者は霊性について話すことだけでなく実践する必要がある。そして一つひとつの行いは、すべてに神が内在するという確信に基づいた行動でなければならないと思う。」

「今日の御講話の中で『本当の教育は、暗闇から光明へと導く』という話があった。スワミがおっしゃっているのは『人々には目があるけれども見ておらず、耳を持っているけれども聞いておらず、心も持っているが、精神的に病んでいる人たちと同じようなものになっている』ということ。また私たちが何らかの状況において悲しみや怒りを一度覚えてしまうと、そのような感情が他の活

動にも持ち越されてしまう。それは自分の行為が他者にとって役立つのか、そうでないのかを考える感覚を無視したことであり、感情の面においての知性が曇ったことを意味している。そのような状態では良い活動はできないだろう。そして同時にこの御講話でスワミがおっしゃっているのは、『真の霊的な求道者というのは社会の利益のことを考える』ということ。もし私たちの心に良くない思いや感情があれば、社会に対しては何も良いことができないだろうと思う。それが心の中の暗闇に相当する部分であり、私たちは心を暗闇から光の方へと導いていかなければならない。そして、それには心がしっかりと、何が正しくて何が間違っているか分かるようにする必要があるのである。そういった識別力が伴えば、私たちの仕事の効率もより良くなり、より良い仕事ができるようになってくると思う。それで持つべき学びというのは、私たちが精神を曇らせるものをしっかりと無視することができるということ。そしてそのような幻影を取り除いていくことだと思う。」

「この御講話の部分を読んで、学生や霊的求道者にとって素晴らしい指示が書かれていると思った。以前のスタディーサークルで、真の教育とはなにか？そのゴールは何か？ということについて、真の教育というものは魂を引き上げるものだとすることを述べられている御講話が紹介された。スワミは自信というものが霊的な求道者にとっては、最初に手にし

なければならぬものだとおっしゃってきた。真の教育というものは、最初に学生たちの中に自信を植えつけるものである必要がある。そして帰依することにおいても土台となるのが自信である。つまり真の教育によって自信を築き、帰依を身につけて、それによって自分が中心の人生から神が中心の人生へと、そういう見方へ変わっていかなければならないということ。」

ババ様の御言葉

「真の学識は、最も深い内側の詳細を完全な正確さで露わにするレントゲンカメラのようなものです。私たちの心は、愛というフィルムを備えたレントゲン写真のようであるべきです。そうであれば、完全な正確さで存在物のすべての特性を捕らえることができます。フィルムが入っていないレントゲン撮影機は役に立ちません。フィルムがなければ何も捕らえることができないからです。それと同様に、愛に欠けた心は役に立ちません。愛は時と共に変化することがありません。愛は持続的で永遠です。」

1996年夏期講習ラーマヤナ

※1 ラーマクリシュナ パラマハムサ：(1836～1886) バクティによって神に到った一九世紀のベンガルの聖者。カーリー女神を熱烈に信愛した偉大な聖者であり、あらゆるヨーガの大家。

※2 マハトマ・ガンジー：モーハンダース・カラムチャンド・ガンディー
非暴力を用いたサッティヤグラハ運動を行う。
インド独立運動の父

※3 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。

開催日：2021年8月18日(水)

テーマ：1996年夏期講習ラーマヤナP95-98「神のために生きる」

参加人数：56名

質問：

- ① ラーマ※1とシーター※2の人生のどのような理想から感銘を受けたか？
- ② どうすれば肉体的にも精神的にも自立できるのか？
- ③ 暴力的なことが必要な状況では、どのように留意して振舞うべきか？

<参加者のコメント>

「シーターをさらわれたり、森で暮らすことになったり、いろいろな波風が降りかかってくる中においても、ラーマの平安を保つ生き方に感銘を受けた。」

「理想としてはラーマが森に追放されたとき、シーターが付いて行って夫婦として共にいる生活を送り続けたという点が一つは挙げられると思う。苦境がたくさんあって、最後にシーターが自分の潔白を2回までも試されようとして最終的に地の中

に帰ってしまい、結局離ればなれになってしまったところを、心情的に見てどうしてそうなるのかなと犠牲のような見方をしていたところがあった。今回、犠牲ということだけではなく、二人のダルマ（正しい行い）として民衆やシーターを疑っていた人々を、シーターの行動によってもう一度神を信じるところに戻したものと今回は受け止めることができた。」

「人の心は全部自分の心の反映で、人の心というのは自分の単なる想像に過ぎないというような御言葉があり、それを真理だろうと思っている。それを忘れると、相手の気持ちを予想して行動するが、結局相手に何かを期待していることがある。」

「自立するということは、自分に自信を持つということだと思う。私はセヴァ（奉仕）を今までやってきて、非常に苦手で不得手なセヴァが多くあてがわれた。お祈りをしながら行うことによって、必ずそれができるようになるという経験をしてきた。そういう経験によって、神がいらっしゃるから何でも必ずできるという自信が少しずつ出てきた。」

「ラーマにとっても従順だった弟のバラタは、まったく権力を求めず、私心がないお手本だったと思う。結局罰することができるのは神ならでのこと。暴力と罰はまた別だが、暴力的なことが必要な状況というのがそれほど思い浮かばない。ラーマがシュールパナカー※3の鼻を切ったとか、ラーヴァナ※4を殺したのは人間の内面の悪い部分を消したという、ラーマ神ならでの業。カルマ（行為の結果）を解消するとか、神によって殺されたことにより、祝福されたアートマ（神我）に転じ、悪い面をなくして神によって祝福された魂になったということだと思う。」

「私の中で暴力的な状況というのは虫を殺すことを最初に思い浮かべた。例えば家の中だったらできるだけ外に逃がすとか、蚊よけを自分に撒くとか、それまでに掃除をするとか、できる限りの努力をして、それでもしなければならぬときにはせめて少しでも神様のことを思い浮かべてマントラ（真言）を唱えることができたと思う。言葉で人を傷つけたり、他者にきつい言葉や目線を投げかけたりということをきっとたくさんしてきたので、できるだけ心の中で御名を唱えたりすることが大事と思う。」

<サイの学生のコメント>

「スワミ※5やラーマが理想を示されたときに、それを単純に理解するのは難しい。『彼らは普通の人間でなくて神様だからそうできるのではないか』と考えてしまうから。もしラーマがたくさん嘘をついたとか人を殺したとかだったら、人は誰も受け入れず、それについてスタディーサークルが行われることもない。ラーマやスワミは人間の姿でお生まれになったが、それにもかかわらず彼らが実践したことと、その質によって彼らが神であると認識されてきた。スワミは『人間としての卓越性は神そのものだ』とおっしゃっている。そしてラーマは人生のすべてを通して完全にダルマの実践をされてきた。ではラーマはどのような特質により、まったく恐れることなく義務を果たすことができたのだろうか？一つ目は忍耐。ラーマの人生の中には忍耐が至る所にある。例えばカイケーイー※6に対して忍耐したり、父親に対しても、森の中で鬼たちに対して、又シーターに対して忍耐を示した。次は粘り強さ。粘り強さは自制心における卓越性。例えば忍耐強さがもしラーマになれば、シーターが誘拐されてしまったときに、アヨーディヤー※7に戻って違う人と結婚することを簡単に行えた。でもそうしなかった。ラーマは非常に忍耐をもって何年もかけてシーターを探し出し見つけた。そうした特質が人間性が卓越した

ラーマの特質。ゆえに彼は忍耐の象徴であるのだ。3つ目が許しという特質。皆さんがご存じのとおりラーマは人生を通してすべての者を許してきた。ラーマが社会に対して行ったすべての善いことに対して、世の中の人々はラーマを批判して困難をもたらした。忍耐や粘り強さ、許しがラーマの特質だった。シーターに関しては勿論、理想の女性だった。シーターの人生を振り返ってみると、良い子供時代ではなく、ラーマと結婚してもラーマと離れることになり、誘拐されてランカー（ラーヴァナの王国）で暮らし、その後はさらに人々から非難された。シーターが示した特質としては、良くない批判は無視して、許し忘れたということ。」

「ラーマの物語ではラーマご自身がヴィシュヌ※8の化身であるということが大きな事実。ラーマが示してきたいろいろな理想を私たちが人生で適用しようと考えていることは、大変祝福されたことだと思う。ラーマの特質で思い出されるのは、ラーマは自分の母親に対して非常に従順であったこと。ラーマは『自分の両親に従順に仕える息子は祝福されている』と述べた。ラーマは許しの性質をもっていて、とても丁寧に親切に接する方であって平静の化身でもあった。ラーマがラクシュmanaに『他者の福祉、幸せが私たちのダルマです』と言われた言葉があった。人生のすべてを通

してラーマは自分のダルマを実践してきた。そしてラーマは犠牲を示すことにおいても模範だった。そのようなラーマの理想を学んでそれを実践していけたらと思う。シーターと聞いて最初に心に思うことは、ラーマに対しての無私の愛。正義とかダルマにも従った方だった。本当に理想の妻であり、娘であった。また多くの辛い状況に耐えたことも特筆に値する。特に感謝を捧げるという点においても、とても寛容な側面があった。最後にハヌマーン※9がシーターを救出したときには、ラーヴァナの命令で守衛をしていた女性が全員殺されそうになったところを『許して開放するように』とシーターが言った。そのように寛容を示していた。総合的にまさに理想の女性だった。」

「スワミは他者の模倣は良くないとおっしゃっている。一人ひとりが個人としての独自性を持つてなければならない。今日、流行とかトレンドを追わず、個人としての独自性に従っていくことが大切。また、他者の自分への判断を気にすることによって私たちが独自性をもって振舞えていないということが起こっている。他の人たちがどう言うとか、他の人たちがどう思っているかで決まり、私たちは完全に他者にコントロールされていると思う。こうしたことをすべて避け、自分自身の足で立つためには、しっかりと自信を得なければならない。そして神を信じるのが、大いに物

を成し遂げるための勇気や自信を強く与えてくれるものだと思う。スワミが『self-confidence』という言葉で自信という意味でおっしゃったが、セルフとは自己と訳されるが、それは神そのもののこと。まず神に信仰を持って、またその神が内にいると信じる。それが精神的にも霊的にも独立していくための第一歩。また精神的に他者に依存してしまうことは、肉体的な意味で物質的に他者に依存することよりも、もっと悪いこと。他者を批判している人々は常に絶えず変化していく。一方、ただ一つずっと変わらないもの、その方に対して私たちが応えていかなければならない。その存在は、私たちの中にいらっしゃる神様だけである。多くの人は他の人がどう思うだろう、何を言うだろうかと思って結局何もできない。多くの人が他者の奴隷になってしまっている。であればこそ神に対して信仰をもつことによって、自立性が得られる。ラーマクリシュナ・パラムハンサ※10も『愚か者に従ってはいけない』とおっしゃっていて、同時に賢い人の真似を単にしてもいけないとおっしゃっている。本当に賢い人に対して従うのではなく、私たちはただ神に対してのみ応えなければならない。」

「今日、肉体的に多くのハンディキャップや困難を持った人がたくさんいるが、それにも関わらず上手く振舞える人々がたくさんいるのを知って

いる。そういった人々は身体に問題があったとしても自信をもっているからそうできる。日本のお年寄りの皆さんは、自分でバスに乗ったり、自分で買物に行ったり、とても自立的に振舞っている方が多いと感じている。また、スーパーマーケットで見かける年長いた女性の方で本当にすごく腰が曲がってしまっている方も一人でスーパーマーケットを歩いていらっしゃる。とても自立されているなどと思って見ている。そして、精神的にどれほど自立することができるか。それは精神的に私たちがどういう能力をもっているのかというポイントになる。何か疑いをもってしまったり、メンタルの強さを必要とする局面に私たちを助けてくれるものは、やはりサイ文献だと思う。」

「私たちは誰も皆そこまで完璧ではなく、皆何が正しくて何が間違っているかということその人なりに判断しようとするが、ラーマの場合は完全な人なので、ただこれは正しく、これは間違っているということだけだった。私たち人間は私たち自身にたくさんの欠点がある。どうして自分たちも持っている欠点を抑えるために暴力を使う必要がそもそもあるだろうか？ そのような態度が私たちがより完全さに近づくのを助けてくれるだろう。ラーマの人生においても、人を傷つけたり殺す場面もあるが、私たちの場合には暴力が必要という状況に直面しても、その状況を平和裏に解決

できるように、その状況が解決するのを待つということではないかと思う。」

「非暴力は私たちの進歩的な霊的な人生において何も障害にならないと思う。私たちがよりポジティブな態度で生きて行こうとするときに、非暴力を実践することがそれを邪魔することはない。一方で社会的な状況で何か平和的な状況を乱すものが社会の中にあつた場合、例えば雨が降る状況で、庭から自分の家の方に虫が飛んでくるときに、非暴力的な観点からは、虫などが家の中に入ってくるべきではないが、虫がどうしても入ってきてしまったら家から出さなければならない。虫を外に出して取り除くということを可能な限り平穏な方法で行わなければならないと思う。またラーマの人生においても、世の中の平安を乱すような社会的な状況があつた。そういった状況の中で世の中に平安を取り戻し確立するために、それを乱している存在を彼は取り除かなければならなかった。その部分を見るとラーマは暴力的な手法も適用したが、それは同時に社会に非暴力を確立するためだった。」

ババ様の御言葉

「『ラーマヤナ』は、兄弟の理想的な関係とはどのようなものか、家族の成員はいかにして両親の愛を手に入れるべきか、夫と妻の理想的な関係とはどうあるべきか、特定の状況にある特定の人間の義務とは何か、などを示す素晴らしい聖典です。ラクシュマナとバラタとシャトルグナは、ラーマの道を固く守り、ラーマの指示に厳格に従って生活しました。この国のすべての家族は彼らの模範に倣うべきです。シーターは、夫のためならいかなる困難にも立ち向かう覚悟、いかなる犠牲をも払う覚悟ができていました。シーターは自分のための安楽は何も求めませんでした。シーターは人生をラーマへの奉仕に捧げました。」

1988年3月26日

※1 ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美德と正しい行いにおける最高の模範。

※2 シーター：トレーターユガの神の化身ラーマ王子の妃、妻としての理想のダルマを世に示した。

※3 シュールパナカー：ラーヴァナの妹。ラーマとラクシュマナに結婚を申し込んでラクシュマナに鼻と耳を切り落とされる。

※4 ラーヴァナ：『ラーマヤナ』に出てくるランカーの羅刹（悪鬼）の王。

※5 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。

※6 カイケーイー：ダシャラタ王の第三王妃。バラタの母親。

※7 アヨーディヤー：サラユ河の岸辺にあったラーマの生誕地。古代インドのコーサラ帝国の首都。

※8 ヴィシュヌ（神）：宇宙を維持し守護する役割を担っている神。

※9 ハヌマーン：『ラーマヤナ』に登場する猿。ラーマを深く信愛し献身をささげた。

※10 ラーマクリシュナ・パラマハンサ：（1836～1886）バクティによって神に到った一九世紀のベンガルの聖者。カーリー女神を熱烈に信愛した偉大な聖者であり、あらゆるヨーガの大家。

開催日：2021年9月2日（水）

テーマ：1976年夏期講習青い山の夏の薔薇P121-P123「カリの時代への警告」

参加者：54名

質問：

- ① ドラウパディー※1の辛辣な質問を、なぜビーシュマ※2は良い質問であると指摘したのか？
- ② ビーシュマの言葉（シャーンティパルヴァ；訓戒）からカリの時代（カリユガ；暗黒の時代）の生き方へのどのような警告を受け止めるべきか？
- ③ なぜ死のときは誕生のときよりも重要で、それをどのように定める術があるのか？

参加者のコメント：

「①についてドラウパディーが質問しなければこの答えを私たちが知ることはできなかった。パンドヴァ兄弟※3は口になさらない質問なので、私たちが知るためにドラウパディーが質問してくださったのだと思う。」

「①についてビーシュマ自身も自分の中の変化を分かっていたと思う。昔、賭けに負けたときに正しい行いできていなかったことを今は分かっていた。それについて目隠しのよう正しい

行いを発見できなかったという点をドラウパディーがよく分かっていたので、他の人々に広く教えてあげるように指摘をしたと思う。」

「この本にはビーシュマのこと、食物のことなどがいろいろ書かれている。『ブリンダーヴァンの慈雨』にも食物に関する記載があり、決して食べ物だけではなく、見るもの聞くものすべてにおいてスワミ※4は『良いものを見なさい。良いものを聞きなさい』とおっしゃっている。いろいろな仕事においていろいろな正しい判断を迫られることがあるが、たとえ正しいことを言うことに軋轢があっても、正しいことを押しとおしていくことではないか。」

「ビーシュマの言葉から教えていただいたことは、本人はすごく神を信じ正義も十分に分かっていたが、実際の行動の中で善であるパーンダヴァ兄弟の側に味方できなかった点だ。生活全体が悪の側に付いて生活していて、食べ物も全部悪の側から得ていたもので、結果的に悪い血となって流れてしまった。それと似たことは現代にもあると思う。動物的な物を食べないということや、生活全般、付き合う人々に関して善の側にいつでも付けるようにし、常に善としての行動を行っていくことが本当に重要。」

「どのように生まれるかは自分で決められないが、死とは生き方そのものが全部現れたものだとスワミがおっしゃっている。どのような死に方をするかによって次の転生が決まるので、どのような生き方をするかによって、死に方を自分で決められると思う。」

「人生の目的は何か。目的から目を離さずに、神との合一というゴールを決して忘れないで、セヴァ（無私の奉仕）によって、祈りによって、最終的にはスワミの恩寵によりたどり着く。カリの時代（カリユガ：暗黒の時代）の邪悪な影響に関して、ハートが思いやりでいっぱいの人や、言葉が真理に満ちている人、身体が人への奉仕に使われている人は邪悪な影響力にまったく影響されないということが、サンスクリット語の詩に記されているということを知った。思いやり、真理、奉仕、祈り、恩寵が神への合一への道だと思う。」

<サイの学生のコメント>

「ドラウパディーの質問は本当にとっても良い質問だと思う。このときにはビーシュマが最期の死の床に伏していて、苦悩していた。そのことに対してドラウパディーが質問した。ダルマラージャが宮廷でギャンブルをしていたとき、そのゲームが正しく行われているかどうかを審判のように仕切っていたのがビーシュマだった。ゲーム全体を通してカウラヴァ側が非常に多くの違法なことをパーンダヴァ側に行ってきた。そのサイコロ遊びのときにダルマラージャ※5が自分自身を賭けて自分自身を失ってしまった。ゲームで失われたはずの自分自身が、次に自分の妻を賭けたが、それ自体がルール違反でダルマに反していた。でもダルマラージャがしてはいけないことを行っても、その審判をしていたビーシュマは何も指摘しなかった。その後、有名な場面であるドラウパディーがサリーを引っ張られ屈辱を受けそうになる事件が起こったときに、その場の仕切り役であったビーシュマはドウルヨーダナ※6を殺すことさえできたはずだったが、一言も異議を述べなかった。なので、最期にビーシュマが死の床に伏しているときに、ドラウパディーは『貴方は本当にそんなことを説いているけれども、人生でダルマが一番必要な場面ですそれをしなかったのではないですか?』と指摘した。このような質問はカリ

ユガの今の時代では本当に大事になっている。なぜならば人々の間で特に権力を持った人々が悪いことや間違っただけを行っていてもそれを止めようとしていない。権力を持った人々がどのような判断をするのかということが、人々の人生を左右するぐらいの力を持っている。判断する人々は自分がどんな判断で権力を振りかざすのか、とてもとても注意していかなければならないと思う。どの組織にいたとしても、その中で行われている特定の悪いことに加わるのを止めなければいけない。今の物語の中ではドラウパディーがたくさん指摘して、それをビーシュマが良い質問だと認めて最後には受け入れた。ところが現在のカリの時代では、その間違いを犯した権力のある人々は、決して間違いを認めることがなく、さらにいろいろな指摘を受けると嘘を言ってまでそれを守ろうとする。カリの時代においてこのポイントがいかに大事であるのかということだと思う。」

「ドラウパディーが指摘したように、本当にビーシュマはそのときには権力があっていろいろな不義を止めることができる権限や能力があったが、それをしなかった。ビーシュマが本当にどうすべきだったか、本当の優先順位はどうだったのかをドラウパディーが述べた。ドラウパディーが宮廷で屈辱を受けそうなときにビーシュマは、ドラウパディーを救うことよりも、仕えていた王に仕

えることを優先していた。そのとき、ビーシュマにあった選択肢は自分の王に対して忠誠を誓うのか、あるいはドラウパディーに対して正義を行うのかの二つだった。複数の選択肢があって、それらに対立することがカリの世の中において、また職場や属する組織でも起こっていることだと思うが、そういった場合にできることが二つあるのではないかと思う。一つは、ビーシュマは食事をいつもカウラヴァ側から頂いていたのでカウラヴァ側を支持しなければならなくなった。このことは、非常に多くのことがどのような仲間と共に過ごしているのかによって大勢が決まると教えている。もう一つ、誤ったことを止める権力のある人は、どのような関わりにおいても非常に注意深くいることが必要。どれほどビーシュマに知識があっても戦う能力があっても、女性を救うことができなければ、持っている知力、能力は無駄になっている。とりわけ権力をもった人は非常に正しい判断を行っていくことが大事。」

「ここで大事なポイントは『黙っていることがときには悪いことに加担するよりももっと悪い』というケースがあること。何が正しいことなのかをただ知っているだけでは充分ではなく、その上でどう振舞うことができるかということ。いかなる霊的な実践に関しても、『知っていても実践しなければ意味がない』と常々言われている。そして

二つ目の大事なことは、どんな仲間と共にいるかということ。私たちは直接的にも間接的にも仲間からの様々な影響のもとにいるだろうと思う。三つ目が食べ物に関する事。このことに関してスワミは食事をする前に必ずフードマントラを唱えるようにおっしゃっている。ブランマールパナムのマントラの一番大事な点は、すべてを神に捧げて、それによってすべての物がプラサーダム（供物のお下がり）に代わり、そこにある悪いものが破壊されることだと思う。如何なる状況の中でも誰でも、何か心の中で言いたいことがあると思う。物事を言うか言わないかというときに、自分の側に真実があるときはそれを言うことを恐れてはいけないということ。そしてどのようにすればいつも正しいことが影を上回るようにするのかという点に関しては、いつもスワミから学んで実践することを通して、影を上回るものをもたらすことができると思う。どんなときも、もしそこにスワミがいたらどうだろうかと考えながら、自分たちの行動を見張っていくことが大事になる。このシャーンティパルヴァ（ビーシュマによる訓戒）から学ぶことは、ただ説教するよりも実践することが大事だということだと思う。」



ババ様の御言葉

「死というものをじっくりと考えることは、まさに霊性修行の基盤です。それがなければ、人は必ず嘘偽りに陥り、五感を悦ばす対象物を追い求め、物質的、世俗的な富を積み上げようとします。死は災難ではありません。死は、その先にある吉祥なる光明へと到るステップです。」

1970年7月18日

- ※1 ドラウパディー：夫の前で辱めを受けてクリシュナ神に救済を求め救われたパーンダヴァ兄弟の共通の妻。
- ※2 ビーシュマ：『マハーバーラタ』の英雄でシャーンタヌ王とガンガー女神との間の子。カウラヴァ兄弟とパーンダヴァ兄弟の大叔父。
- ※3 パーンダヴァ兄弟：「パーンドゥの息子たち」の意。『マハーバーラタ』に出てくるパーンドゥ王の五人の息子。
- ※4 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
- ※5 ダルマラージャ：パーンダヴァ兄弟の長兄、ダルマの王の意、ユディシティラの別名。
- ※6 ドゥルヨーダナ：『マハーバーラタ』の悪役。カウラヴァの百人兄弟の長男。



Jai Sai Ram



Manasa Bhajare Guru Charanam